AACK 京都大学学士山岳会 No.56 別冊

Newsletter

March 2011

http://www.aack.or.jp

目次

梅棹忠夫先生を悼む 数々の思い出 斎藤惇生……1
登山家としての梅棹忠夫さん 平井一正……4
梅棹忠夫先生を偲ぶ 大貫良夫……6
「国際山岳年」と一五才の『山城三十山記』 江本嘉伸……7
梅棹先生と泉先生 鹿野勝彦……8
〝不肖の弟子〟として梅棹先生を偲ぶ 本多勝一……9
探検家梅棹忠夫先生の光彩 沖津文雄……13
アジテーターとしての梅棹忠夫先生 山本紀夫……15
いろいろ知恵をつけてくれはった梅棹さん 岩坪五郎……16
梅棹さんの登山とAACK 斎藤清明……17
梅棹忠夫さんとの出会い 栗田靖之……20
梅棹忠夫氏略年譜（栗田靖之編）……21
図書紹介 山をたのしむ……25
特別展「ウメサオタダオ展」……26

特集 梅棹忠夫さんを偲ぶ

1980年、還暦の直前、国立民族学博物館の館長室にて撮影

梅棹忠夫先生を悼む 数々の思い出

斎藤惇生

はじめに

二〇一〇年七月三日、梅棹先生は亡くなられた。私がその訃報を知ったのはペルーのリマだった。ペルーアンデス研究の権威者山本紀夫を隊長兼ガイドに、アンデスのコルディエラ・ブランカのトレッキングにワラスに向け出発する七月六日の朝だった。この報告はニューズレター五四号に前田司が書いている。先生の体調があまり勝れないことは知っていたが、何か急に深い穴がぽっかり空いたような感慨を受けたのだった。夜ワラスのレストランで、チリーワインで献盃し山の大先輩の死を悼んだ。

梅棹先生の果された業績は、動物学、社会文化人類学、民族学、比較文明学ときわめて多岐で、朝日新聞の天声人語は「知のデパート」の静かなる閉店であると書いた。

私は二〇〇二年に先生のかなりひどい痔の手術をした。その後アレルギー性のしつこい咳、原因がはっきりしないしゃっくりなどに悩まされ、肺癌続いて胃癌の手術も受けられた。病魔の克服にはいつも積極的だった。糖尿病、膵炎、動脈硬化などの治療に好きなワインも絶って専念された。看病された夫人の苦労はたいへんだったと思う。しかし九〇歳の高年齢には勝てなかった。

山は人生のルーツ、日本山岳会名誉会員

梅棹先生はいつも自分の学問活動の原点は山であるといい続けておられた。二〇〇九年に出版された最後の著書「山をたのしむ」のオビに「山をしらなければ今日のわたしはなかった。山はわたしの人生のルーツであり、すべての出発点なのである。」と本文のなかの一部が引用されている。

先生は一九六二年日本山岳会（ＪＡＣ）入会、これはＡＡＣＫよりＪＡＣへ委譲されたマナスル計画に参加するためだった。しかし運悪く肺結核を発病し参加を断念した。

一九九五年、ＪＡＣは先生を名誉会員に推挙した。高峰登山でなく探検の実績、登山文化に対する功績が高く評価された。先生は一九八六年球後視神経炎の発病で突然に視力を失われた。しかし一二月のＪＡＣ年次晩餐会に出席された。先生はこれまで文化勲章を含めおおくの賞を頂いたが、ＪＡＣの名誉会員賞を受けたことが何よりも嬉しいと述べられた。終生登山家としての自負を持ち続けておられた先生の本心であったと思う。

北山そだち

先生の登山は京都一中の山岳部に始まっている。今西錦司、西堀栄三郎先生たちが青葉会を結成し山城三十山を選び登った。梅棹先生たちは視点を変えて新しく山城三十山を選びなおした。部員は卒業まで全山完登を目指した。そして「山城三十山記」と題して上下二巻の報告書をガリ版刷で出版した。

一九九〇年ＪＡＣ京都支部員の大槻雅弘が京都府の資料館でこれを見付けた。支部はこれによる山行を行事として取りあげた。一九九二年新春の登山は愛宕山だった。報告は私が指名された。改めて山城三十山記を読んだ。愛宕山の執筆者は梅棹先生だった。読んで驚いた。愛宕山の概説、地理歴史、各登路解説、所要時間などすべてが引用でなく、自分で文献を調べ、自分の足で確かめて書かれたものであった。一五歳前後の少年たちの郷土の三十の山に傾けた情熱が感じとれる報告書だった。私は京都支部だよりに、この愛宕山の文献はまだ第一級の資料価値を失っていないと書いた。

新春登山のすぐあとの一月七日、梅棹先生に会った時、私は京都支部が山城三十山を始めたことを話した。先生は「ほう」という顔をされ経緯を知らせて欲しいと言われた。私が「先生たちは早熟でしたね」と言うと「俺もそう思う」と答えられた。そして本当はもっと山をやりたかったが身体を悪くしてできなかったと残念そうな声だった。千里文化財団の同人誌「千里眼」三七号に「北山そだち」を投稿された。その最後に「山城三十山」はこうしてあたらしい時代において信頼できる後継者をえたのである、と書かれた。

カカポ・ラジ、挫折した登山家

ＡＡＣＫは一九五八年チョゴリザ、一九六〇年ノシャックと初登頂に成功したが、次の目標のサルトロ・カンリの許可がなかなか取れなかった。一九六〇年の秋の終わりごろ、ＡＡＣＫの会合があり若手が招集された。そこに梅棹先生が来られた。そしてビルマの中国国境近くにカカポ・ラジという五八六六ｍの山があると写真を見せられた。山は高くはないがその一帯は調査されたことのない空白地帯である。登山と学術調査を来年計画しているが希望者はいないかと提案された。写真を見て山容は素直で物足りない気がしたが地域的に面白そうだと感じた。思わず手をあげた。先生はほっとしたような顔をして「斎藤行くか」と言われた。谷泰とともにノシャックから帰ったばかりの酒井敏明、探検部の荻野和彦も手をあげた。先生の顔を見ていると新しい面白いことを思いつき、やり始めようとするいたずら子のように、だんだんいきいきとしてきた。学術関係のメンバーは大阪市大の人が主だった。準備は大阪市大の一室で始められた。部屋ではいつもビルマ語のレコードが耳ならしに廻っていた。

残念ながらこの計画はビルマ政府の許可がおりず中止になってしまった。もし実現して先生と一緒に行動していたら、それからの私の山行に対する考え方、態度がかなり違っていただろうと思う。

梅棹先生は「挫折した登山家」という題で「山をたのしむ」の最初の終生登山家、序にかえてのなかに一文がある。「カカポ・ラジ計画を実行にうつすことができれば、わたしはヒマラヤにつづく高峰群のエクスペディションの隊長として、国際的な登山史のなかに名をのこせるはずであった。わたしの登山家としての経歴はここで一頓挫をきたしたのである。」と口惜しさがほとばしるように書いておられる。

白頭山縦断

一九四〇年の夏、旧制三高の学生、藤田和夫、伴豊、梅棹の三名は朝鮮北部の登山に行き、最後白頭山に登った。山頂の神秘的な火口湖天池から流れ出る水は、すぐ瀑布となり北へ向う。三名はこの河に沿い未踏の大樹海のなかを、時計を失くし時は太陽で判断、磁石をたよりにして倒木を乗り越えイバラに悩まされながら北へ進んだ。約四〇㎞を三日で突破できると予想したのだが、食糧がつきかける寸前の六日目に麓の二道白河に辿りついた。それまでの地図は天池から流出する河は三道白河となっていたが、二道白河であることを証明した。これで第二松花江の源流の確認者の地理学上の栄誉を得られた。この報告は「白頭山の青春」の題で一九九五年に出版された。

二〇〇九年の秋、私は中国側から長白山（白頭山）に行く機会があった。梅棹先生たちが辿り着かれた時は二軒の民家と守備隊の小屋しかなかった二道白河は、長白山の登山基地となり人口六万の街に変貌していた。街から長白山に向って坦々とした舗装道路が、先生たちが苦闘された樹海のなかを、二道白河に沿って通じている。バスから四輪駆動車に乗りつぎ終点の広場に着く。そこから一五分ほど登ると二六七〇ｍの天文峰である。澄んだ深い青藍色の水をたたえた天池を見下す。荒々しい赤褐色の火口の岩壁、この対比に梅棹先生はこの世のものと思えぬデモーニッシュ（悪魔的）な景観と興奮されたようだ。私はこれを見ながら梅棹先生が山と共に未知の土地への探検へと深く進まれる原点に白頭山縦断山行があったと確信した。

梅棹忠夫著作集　山と旅の月報

一九九〇年代の前半に中央公論社から梅棹忠夫著作集二二巻が出版された。第一六巻の「山と旅」の附録の月報に光栄にも私にも執筆依頼がきた。私はその時、日中合同ナムチャバロワ峰登山隊に参加のため準備に追われていた。それでＢＣで書くことにした。ＢＣのテントに坐って先生との交流の思い出を書いた。ＢＣには後援の読売新聞の報道班がいてＦＡＸがあった。書きあげて原稿を民博に送った。翌日だったと思うが三ヶ所ほど訂正の指示のある原稿がＦＡＸされてきた。訂正して送るとまた一ヶ所訂正指示の原稿がきた。梅棹先生が秘書の人に読んでもらい訂正する所を指示されたのだろう。最後に送った原稿の文尾に「ナムチャバロワ峰登山隊ベースキャンプにて記」と書いた。五日間ほど上方で悪天候と雪に苦闘している隊の無線を聞きながら、原稿にかかりきりだった。またとない思い出になる経験だった。その月報の執筆者は私の他に、木村雅昭、山下俊彦、四方治五郎の三氏であった。

山をたのしむ

先生の最後の著書は二〇〇九年七月、山と渓谷社の尽力で出版された「山をたのしむ」になった。近年若い人たちの山や探検に対する興味が薄らぎ、各大学の山岳部、探検部の部員が激減している。それに伴って日本のフィールドワーク系の学問を志す者も減少している。先生はこのことに危機感を持っておられた。自分が楽しんできた山のこと、すべての活動の原点が山であったことを示し、登山の興隆とフィールドワークの学問を志す若者の輩出を期せられたのではないかと思う。

「山をたのしむ」のなかに「ＡＡＣＫの山のぼり」と題した座談会の収録がある。二〇〇八年一二月一八日、民族博物館で先生をかこみ、平井一正、岩坪五郎と私が参加した。内容はパイオニアー精神を軸に活動してきたＡＡＣＫの歴史と未来を語った。抜群の記憶力の持ち主であった先生の脳力は体力の低下に伴ってかげりがあった。しかし我々が具体的に話題を出すと思い出して話される内容は完璧であった。坐っておられるのに筋力の低下から、ずるずると滑り落ちそうになられるのがいたいたしかった。この対談後一年七ヶ月、本が出版されて丁度一年で先生はこの世を去られた。「山をたのしむ」は終生登山家であった先生の貴重な遺書になった。

先生の御冥福を心から祈る。

登山家としての梅棹忠夫さん

平井一正

はじめての出会い

兄貴分的存在であり、多くの点でお世話になった梅棹さんが亡くなった。生き字引のように何でも昔のことを教えてもらい、また鋭い切り口の論説、批評などで刺激を与えてもらった、先生の謦咳にもう接することができないと思うと寂しい限りである。

私がはじめて梅棹さんに会ったのは、一九五一年春、百万遍のかぎや政秋という喫茶店の二階であった。山岳部リーダの築山がOBによびかけて、それまで疎遠であった先輩諸氏との接触の機会を作ったときである。木原、今西、鈴木信、藤平などとならんで、白皙青年の梅棹がいた。三〇歳そこそこの、額にぱらりとかかる前髪が、剣豪佐々木小次郎を彷彿とさせた。山岳部の報告を聞き終わったら、天気図にしろそんなことはわしらはとうの昔にやっている、といわれたことを覚えている。まだ一年生であった私にとって、先輩の先生がどれだけえらいか何も分かっていなかったが、ひときわ梅棹さんだけが印象に残っている。

それから約六〇年、時にふれ、陰に陽にいろいろとお世話になった。先生の追悼として知る限りのことを追懐してみる。

登山家としての歩み

梅棹（以下敬称略）は京都一中から登山をはじめ、同じく京都の第三高等学校では一年生からみっちり登山をたたきこまれた。一九三六年に三高に入学した前年、三高山岳部は御岳などで遭難があいつぎ、壊滅状態であった。その再建の責を負った鈴木信のもと、夏には、まず南アルプス遠山川から赤石岳など縦走、下山後すぐ北アルプスへ転じ、槍が岳から薬師岳へ縦走した。北アルプスと南アルプスを一夏で登ったわけで、装備や食料の軽い現在でもきびしい山行である。まして梅棹は小学五年から中学へ、中学四年から三高に入っているので、このときわずか一六歳であり、まだ初々しさの残る少年であった。ちなみに何年も浪人して三高に入った猛者が、あんな子供と一緒に勉強するのかと嘆いたほどであった。そんな梅棹少年が、山のような荷物をもって登山している姿を想像するだけで痛々しくもほほえましい。

夏に続いて冬はスキーとアイゼン練習をし、そして翌年春には、スキーを駆使して黒部源流に入り、薬師岳、鷲羽岳、黒部五郎岳など周辺の山々を登った。これは当時としては画期的な山行であり、現在でも注目される記録である。梅棹はこれらの山行で大きな自信をもった。壊滅状態にあった三高山岳部も梅棹らの活躍でようやく勢いをとりもどし、三八年には自身プレジデントになって山岳部をリードした。しかし川流れ（兎洞）や転落（八つ岳）、雪崩（天狗原）など、危険な目にもあっている。梅棹のその後の多彩な活動はこうした一中、三高時代の登山が出発点になっている。

探検家としての歩み

梅棹は三高三年のとき（一九四〇年）、同期の藤田和夫、伴豊などとともに朝鮮半島北部の白頭山に登頂し、それから、匪賊が跋扈する北部の森林地帯をくだり、第二松花江源流が地図と異なることを発見した。すでにこの頃から梅棹は海外の山と探検に目を向けていた。梅棹にとって探検家としての大きな分岐点はこのあたりであろう。登山を通して未知へのあこがれが大きくなり、未知の領域の探検家として着実に歩みはじめた。

梅棹をとりまく環境は、梅棹を探検家に仕上げるべく整っていた。すでに一九三一年今西錦司らによってヒマラヤ未踏峰登頂を目的とした京都大学学士山岳会（AACK）が設立され、カブルー（七三三八m）やK2（八六一一m）登頂を目的とした計画が生まれている。しかし戦局が激しくなるとともに、ヒマラヤ登山はむつかしくなり、AACKは開店休業となる。それにかわるものとして、探検を目的とした京都探検地理学会が一九三九年に発足した。梅棹はそのどちらにも入会している。

そして一九四〇年冬、梅棹は探検地理学会が派遣した東北樺太調査隊に今西寿雄らと加わり、我が国はじめての犬ぞりの研究をする。そして四一年には今西錦司隊長のポナペ島調査隊に参加し、フィールド研究者として訓練をつみ、さらに翌四二年には同じく今西隊長

のもと北部大興安嶺探検隊隊員として、地球上最後の地図の白色地域の探検に成功している。これらの経験を通して、梅棹は未知の世界の探求にますますのめりこんでいった。そして大学を卒業した四四年五月から張家口の西北研究所で遊牧民の研究をしている。新婚まもない夫人も同行したが、現地で敗戦をむかえ、戦後の混乱期の引き上げに苦労して、京都に帰ったのは四六年であった。

登山家としての熱い血

敗戦とともに京都探検地理学会は解散し、その流れをくむものとして五一年京大に生物誌研究会（略称ＦＦ）が誕生する。そしてＦＦから申請したマナスル登山が、西堀栄三郎の努力によってネパール政府から許可された。しかし計画の推進役今西錦司は、その規模から考えてその許可を日本山岳会に移譲した。登山家と自負していた梅棹は、当然このマナスル計画に参加するつもりで、準備をはじめたが、肺結核を患い療養生活を余儀なくされ、マナスル登山はあきらめざるを得なかった。

登山はあきらめたが、病から回復した梅棹は一九五五年の京都大学カラコルムヒンズークシ学術探検隊に参加したのを皮切りに、東南アジア、アフリカ、サハラ砂漠など多くの学術探検を行った。

梅棹は、登山と探検の分野で広範囲に活動しているＡＡＣＫには好感を持っていて、よく相談にのってくれた。「ＡＡＣＫは団結鉄よりも固く、人情紙より薄しや」といいながら、私がヒマラヤ登山隊の隊長として募金するときには、紹介状をかいてくれたり、よく助けてくれた。

梅棹は三高時代から、未知にあこがれる探検家と同様登山家としての熱い心を持っていた。たとえばタイの学術調査でも最高峰ドイインタノン（二五七六ｍ）に登るなど、山があれば登ろうとする登山家でもあった。また不許可にはなったが、一九六一年にはビルマの未踏の最高峰カカポ・ラジ（五八八一ｍ）登山計画を立てて準備をすすめた。梅棹は三高でオールラウンドな登山をたたきこまれたために、アルピニストと呼ばれるのを嫌い、マウンテニアであるとの誇りは捨てなかった。

梅棹は語る、山を知らなければ今日のわたしはなかった。山はわたしの人生のルーツであり、すべての出発点なのである、と。それだけに一九九五年に日本山岳会の名誉会員に推薦されたときは、「それまでに文化勲章をはじめいろいろな賞を頂いたが、この賞が何よりも嬉しい」と、たいへん喜ばれた。また二〇〇二年国際山岳年では、山と文明、登山と観光開発などについて、各地の山岳関係者に請われて多くの講演をした。

後輩を育てる

戦後まもなく、藤平、伊藤らによって新しく誕生した京大山岳部に対しては、どこの馬の骨ともわからん奴がと、白眼視していた。そして彼らが海外遠征の手始めとして、アラスカに行く計画をしていると聞いた梅棹は彼らを呼びだして、アラスカなど何をねぼけたことを言っているのか、ヒマラヤの無念をヒマラヤで果たさずどこで果たすのか、と怒鳴りつけた。この一喝が、その後京大がそれ以後一路ヒマラヤをめざした大きな分岐点になった。

梅棹は若い人の話をきき、彼らを育てるのに熱心であり、彼らの情熱の実現に力を惜しまなかった。一九五〇年、五一年冬には信州蕨平にて洛北高校（旧京都一中）、鴨沂高校山岳部の合同スキー合宿の総リーダとして指導に当たった。また一九五六年に山岳部から独立して探検部が創設されたが、この動きを梅棹は全面的に支援し、創設に大きく尽力した。

さらに一九六〇年頃から、北白川の自宅を開放して、談論の場とした。この梅棹サロンは山岳部や探検部などの多くの若者に大きな影響を与えた。チョゴリザ隊の公式報告書は、梅棹のアイデアで関係者による座談会形式をとったが、梅棹サロンが終わってから、深夜まで速記者の原稿に手を加え、巧みに原稿に仕上げるのを身をもって我々後輩に教えた。

人の偉さはその人が与えた影響力の大きさによる。その意味で梅棹は、登山家としても探検家としても、民族学者としても、またそのほか多くの専門分野でも、常に時代の先を見通し、実践した偉大な存在であった。そうした多くの知的領域における業績は、その根元に登山と探検があり、常に未知を求めて活躍した梅棹の足跡は、ひとりの人間がなしえた最大級のものではなかろうか。

梅棹忠夫先生を偲ぶ

大貫良夫

一九六八年の頃だと思う。私は東京大学文化人類学教室の助手であった。ある日、主任の泉靖一先生から赤坂の中華料理屋で会合があるから一緒に出るようにと言われた。丸テーブルにいたのが誰だったか記憶があいまいだが、岡本太郎さんが座の中心であった。そしてその横に梅棹先生、その隣だったかに太った人物が居て人類の進化とか文化とかいろいろと関西弁でよくしゃべる人が居た。あとで聞いたらそれが小松左京さんだった。泉先生も交えての話は、大阪万博で政府館の企画は岡本さんが担当する、世界の神像と仮面をたくさん展示したい、ついては文化人類学の研究者に収集をしてもらいたいということであった。その収集品はのちに作ることになる国立民族学博物館の資料になる約束ができた。梅棹先生のお話を親しく聞くのはそのときが初めてであった。山口昌男さんがこのとき以後の泉・梅棹両先生を「東西の両手配師」とよぶようになる契機であった。大阪万博は一九七〇年に開催され、その終了後間もなくして泉先生が急逝された。そして開設された民博準備室は梅棹先生が室長として精力的に力を揮われることになった。

万博に関連しては名鉄すなわち名古屋鉄道株式会社も関心を持っていて、終了後各国のパビリオンを犬山に移築して「リトルワールド」という世界文化の博物館にしたいという意向で、泉先生に相談に来ていた。スミソニアン自然史博物館に居た経験を買われて私が会合に呼ばれ、何を言ったか覚えていないがあれこれと生意気な意見を述べたのであろう、名鉄は博物館計画のために私を雇いたいと言ってきた。泉先生の後押しを頼りに一九七〇年六月私は名鉄の社員になった。そしてその年の一一月泉先生が急逝した。

困惑していた私に後任には江上波夫先生はどうかと生物学者の宮地伝三郎先生が言われた。日本モンキーセンターの関係で宮地先生は名鉄との縁が深かった。私は京都に梅棹先生をお訪ねした。先生はリトルワールド計画にも深い関心をお持ちで、江上先生を中心に進める方向を積極的に支持された。話の終わり頃石毛直道さんをお呼びになった。私を慰労せよとのことだったのだろう、石毛さんはバイクの後ろに私を乗せ、魚屋に寄って魚を買い、ご自宅で手料理を振舞ってくれた。

民博準備室が開設され、梅棹先生を中心に展示企画委員会が組織され、年に何回か、モノレールの駅に近いプレハブの建物で会合が開かれた。梅棹先生の推薦で私は委員の一人となった。そしてそこでまた小松左京さんとも一緒になった。民博側の研究者と外部の専門家によって具体的な展示構想をまとめるというのが委員会の役割で、先の小松左京さんのほか川添登、黒川紀章その他錚々たる顔ぶれであった。この委員会を通じて私は梅棹先生のいろいろな考え方や視点そして感性といったものを直接的に見聞きすることができた。これは今思うと得がたく貴重な経験であった。

民博の建築図面では収蔵庫が広く取ってあった。「まだ所蔵する資料も少ないし、こんなには必要ないでしょう」という質問に対して、梅棹先生が言うには「広い空間が余っている、これを埋めてないのは仕事をしていないからだと感じて、収集品を増やす努力をするようになる。狭いとすぐいっぱいになって、集めようという気持ちが弱くなる」とのことであった。

定期刊行物の種類も一機関にしてははじめから多かった。そのことでもこんな風に言われた。「こういう計画にしてそれぞれに編集員会を設けると、なんとしても期日までに原稿を集めなければならなくなる。そこで誰かに書かせることになる。結果として研究者の書く論文の数が増える。民族学の研究者はほっておいたらフィールドにばかり出かけよって論文など書かへんのや」。その頃何かの雑誌に経済の話が出ていて、需要が生まれるのを待って供給すべきものを生産するというのではだめで、その生産物への需要は供給側が作り出さなければならないのだとかいう主張が述べてあり、なるほどと感心したのだが、先生の方針はそれと相通じてますねと言うと、「そうや、そういうことや」とにんまりとされた。

民博が開館して梅棹先生は正式に館長に就任された。しばらくは展示企画委員会が存続したが、やがて解散になった。私のほうはその後運営協議員にもなり、また共同研究員と

しても、民博をしばしば訪れた。会議の後に館長室でしばらくのあいだ雑談をしたものだが、それは楽しい時間だった。そういう縁で、今度は「文明学の構築をめざして」というシンポジウムに招かれた。事前にいくつかの議論の録音テープやレジュメがパネリストには渡されていた。「文明」という言葉の使い方で私は先生と考えを異にしたが、いろいろと刺激される討論であった。そしてこのときの司会がまたもや小松さんだった。

お会いするたびに感心したのだが、先生はいつも静かで落ち着いていた。あわてる姿や大げさな身振りは見たことがない。民博館長としてはいろいろと悩みや苦労があって腹の立つこと、投げ出したくなることなどあったのではないかと思うが、そういうときはどうしたのかということを聞いてみたかった。こちらの想像や予想と違う返事が返ってくることが多かったのでそれが梅棹先生と話しをするときの楽しみだった。

数年前の大阪のホテルでのお祝いの会が梅棹先生にお会いする最後の機会となった。おそらくもうお目にかかることはあるまいと内心では覚悟した。そして昨年に先生の訃報を聞いた。まもなく私はペルーに出かけた。山々を見はるかす遺跡に立って、先生をアンデス古代の遺跡にご案内し、感想をお聞きすることのなかったことが悔やまれた。あの声、独特の語り口、あの笑顔、そしていつもきらきらと輝いていた目、人の話によく耳を傾けていた姿勢など、忘れることのできない私の師の一人である。

（東大山の会、日本山岳会会員、
野外民族博物館リトルワールド館長）

「国際山岳年」と一五才の『山城三十山記』

江本嘉伸

日本人の探検、冒険の記録を残そう、と地平線会議という活動を始めて三二年になる。一九七九年九月を第一回として毎月欠かさず開いている「地平線報告会」という集まりは、二〇一一年一月二八日、関野吉晴氏の「家船（パレ）に生まれて海に眠る」で三八一回を数えた。携帯電話を手にした、「バジャウ」と呼ばれる漂海民の最新報告である。地球を舞台に活動する挑戦者たちの行動に注目し、その軌跡を追っているのだが、先達の足跡、その行動、思考に啓発されることは非常に大きい。発足当初毎年出していた探検・冒険年報『地平線から　一九八一』では、座談会「地平線を夢見る若者たちへ—今西錦司さんに聞く」という特集を組んだこともある。

当然、梅棹忠夫さんも全力で分け入って何かを盗み取りたい、偉大な山脈であったが、視力をなくされて無理をお願いしにくくなってしまった。それでも、梅棹さんには、ふりかえってみると、モンゴル、チベット、山、と三つの世界でお世話になっている。モンゴルは新聞記者時代、モンゴル遊牧草原の取材からチンギス・ハーンはどこに眠っているか、モンゴル、日本の学者たちと探索する仕事を企画したことがあり、参加はされなかったが、種々アドバイスを受けた。チベットについては、河口慧海と同時代、チベットを目指して帰らなかった東本願寺の学僧、能海寛（のうみ・ゆたか）の縁である。島根県の故郷で「能海寛研究会」を立ち上げた波佐文化協会がサントリー地域文化賞を受賞した際、能海の評伝を書いた者として会場に駆けつけ、審査員であった梅棹さんにご挨拶したのだった。

そうした出会いの末、「国際山岳年」をきっかけに、梅棹忠夫さんとの縁が深まったのは、まことに嬉しいことだった。

梅棹さんの近著『山をたのしむ』（山と渓谷社）の冒頭に、「終生登山家—序にかえて」という文章がある。

ご存知の通り、「梅棹忠夫著作集」（中央公論社　全二十二巻）の文章の多くは、京都から千里に居を移し、「千里眼」という地域同人雑誌をつくり、そこに「好きなことを、好きなときに、好きなだけ書いた」ことの成果である。そのうち「書きたいものがなく、書きたい気もおこらない」状態となった、という。しかしある年、転機が来た。

《しばらく書かないでいたのだが「国際山岳年」を機に山との縁が切れないでいる自分に気づいた。わが人生にとって山とは何か。自分と山とのかかわりをあらためてかんがえなおして、それを文章にした…》

二〇〇二年という年は、山好きの人間たち

だけでなく、日本という国の未来にとって、大事な一年であった。「国際山岳年」。世界がおそらく歴史上初めて合意して定めた「山の年」だったのである。

世界七二の国々に国内委員会が発足し、日本でも〇一年一一月、登山家の田部井淳子氏を委員長に、登山組織の代表と、地理、植物、森林などの学術代表を委員として「国際山岳年日本委員会」を組織し、前後四年にわたって仕事をした。その際、北大の小野有五教授の縁で特別顧問のひとりとしてお願いしたのが、梅棹さんである。

日本委員会事務局長をおおせつかった筆者は当時、何度も千里に通った。山を語る時の梅棹さんの生き生きとした表情、口調が今も懐かしい。とりわけ中学時代の京都・北山小屋での体験を語る時は、きのうのことを話すかのように楽しげで、聞いているこちらがわくわくした。

二〇〇二年一一月一六日には、朝日新聞社、国際山岳年日本委員会が共同主催した大阪でのシンポジウム「山との出あい―百名山が問いかけるもの」で講演をお願いした。朝日新聞に特集記事として紹介され、日本委員会公式報告書『我ら皆、山の民』に全文採録されたその内容は、前述した『山をたのしむ』にも収録されている。

その講演の際、聞き役となった筆者は、最後に若き日の梅棹さんが書いた文章を読み上げさせてもらった。ガリ版刷りの手書き文集、『山城三十山記』。その編集後記である。

「この三十山記を書くに当たって図書館あるいはその他の書籍で調べたものが大変多いようであるが、山へ行く人はこのような態度が欲しいと思います。ただ単に山へ漫然と登り漫然と下るのでは真の山の楽しみはわからぬ」

「このような学問的研究的な態度であってこそ山の楽しさはうんとよくわかると思います。実に山は一大総合科学研究所であります。この研究所で、もっとうんとお互いに山を研究し、知識を増そうではありませんか」。

昭和一〇年七月三日、梅棹さん一五才の時の文章。ここに「国際山岳年」の精神のひとつが込められていることに驚いたのである。

大阪のシンポジウムの最後、梅棹さんが会場のおとなたちに向けて何度も強調したことがある。

「みなさんに、ぜひとも申し上げたい。子どもたちを山へやってください。体育の問題じゃないんです。日本の科学の問題なんです。」自身が山に学んだ少年時代を思い起こしつつ自然界での体験がいかに大切かを繰り返したのだ。何か遺言のようにも聞こえた。

冒頭に紹介させてもらった、毎月の「地平線報告会」には時には親とともに小学生も中学生も参加する。七六年前、北山小屋で梅棹少年の心にともった灯を及ばずながら、絶やさず伝えてゆければ、と願う。

（東京外国語大学山岳会、日本山岳会会員、地平線会議代表世話人）

梅棹先生と泉先生

鹿野勝彦

梅棹先生を偲ぶ文を寄せてほしいとの依頼を頂いたが、私の場合、梅棹先生の思い出は、そのまま直接の恩師である泉靖一先生につながっている。はじめて梅棹先生にお会いしたのも、両先生が編集委員をしておられた『朝日講座・探検と冒険』の会議に泉先生の助手として陪席した一九七〇年夏のことで、私は東大文化人類学研究室の大学院生だったのだが、日本山岳会のエヴェレスト隊からもどったばかりであり、そんなことも梅棹先生は記憶に留めて下さったようだ。

当時、お二人は万博テーマ館の展示資料収集を終え、国立民族学研究博物館と名古屋鉄道がスポンサーとなる人間博物館リトルワールドという、壮大な二つの博物館構想の具体化に取り組んでおられたのだが、その年の一一月、泉先生は急逝される。その後、民博は梅棹先生が中心となって、リトルワールドも江上波夫先生が後を引きつぐことで、開設にこぎつけるわけだが、私自身は『探検と冒険』の残務を終えたあとしばらくは、ヒマラヤでの登山やフィールドワークで出かけることが多く、梅棹先生との接点も無くなっていた。

再び先生とお目にかかるようになったのは、一九七五年に私がリトルワールドのスタッフに採用されてからである。リトルワー

ルドは財団法人という組織形態をとっていたが、財団設立の当初から先生は理事として、その運営にかかわっておられた。「そうか。あんたがここへ来たんか。そら、よかったな」理事会の席で、そんなふうに声をかけて頂いたことをおぼえているが、そこには、これは泉先生の仕事なのだ、しっかりやれ、というニュアンスが含まれていたのだろう。

実際に博物館としてのリトルワールドが開館したのは一九八三年三月だから、それからさらに八年後になる。その間、先生ばかりでなく、民博の多くのスタッフにも、リトルワールドはなにかとお世話になったのだが、その背景には、やはり盟友泉靖一の手がけたプロジェクトをよりよい形で完成させたい、という、先生の意思が働いていたはずだ。そのことはリトルワールド開館の直前に『月刊みんぱく』の「館長対談」に呼んで頂いたときの言葉のはしばしからも、うかがえる。

そのとき、若気の至りというか、私は民博のありかたなどについても随分生意気な発言をしたのだが、先生は終始温顔で聞き流して下さった。すでに大人の風格を漂わせておられたのだが、当時の先生は、実は今の私の年齢より五歳も下だったということに思い至ると、改めて汗顔の至りではある。

対談では、私個人のヒマラヤでの山登りのことも取りあげられたのだが、誌面には掲載されなかったことも含め、私の経歴の細部まで把握しておられるのには驚いた。私に限らず、『月刊みんぱく』の「館長対談」の相手に関しては、先生一流の周到な情報収集をなさっていたのだろう。ネットを使えばひととおりの情報は容易に手に入る現在と事情が全く異なる、三〇年近く前のことである。

私がエヴェレストへ行ったときには、博士課程進学のための口述試験の日程を一カ月ほど繰りあげてまで支援して下さった泉先生を、「あまい教官やな」と笑いながら、「いいかえれば、かれ自身に、それだけヒマラヤへの憧憬があったということやろな」、「わたしはほぼ同世代やから、かれの心情はいたいほどよくわかる」とも言われた。私自身は、実は泉先生ご自身のヒマラヤへの思いを、直接うかがったことがない。それを識ったのは、期せずして遺書となってしまった『遥かな山やま』の内容と、梅棹先生の八〇枚にも及ぶ、「泉靖一の山と探検論」というべき「あとがき」などからだ。「ところで、次はどこへ行くんや」、「来年、カンチェンジュンガを縦走する準備をしてます」、「そうか、カンチか。そら、ええな」対談を終えて席を立つ際に、そんなやりとりもあった。

その後、梅棹先生とは何かの会合でごあいさつする程度で、ゆっくりお話をする機会もないまま、時が過ぎてしまったが、二〇〇九年夏に先生の『山をたのしむ』が刊行され、その書評を書くことになった。冒頭におかれた「終生登山家―序にかえて」の部分で、私は虚を衝かれる思いをした。先生は自らを「挫折した登山家」と規定しておられるのだ。私などから見れば、「挫折」などとはまるで縁のない生き方をしてこられたはずの先生が、こと山登りに関しては、そんなふうに思っておられたのか。あのときの「いたいほどよくわかる」という言葉の意味が、あらためて身に沁みた。

だが、その「挫折」こそが、分野・領域を超えて新しい境地を切り拓いてゆかれた両先生の原点だったのかもしれない。そして、先生方の世代にとっては遥かな憧憬の対象であったヒマラヤは、私達には目の前のリアルな目標となっていた。そこへ旅立とうとする私達の背中を、ときに力強く、ときにはさりげなく押して送り出して下さったのも、両先生を筆頭とする世代の方々だった。

その意思を私達はどれだけ受けとめ、あるいは引き継げているのだろう。「あんたらがしっかりせんと、あかん」、そう叱咤された思いで、『山をたのしむ』を読み終えたのだが、先生の訃報を聞き、その感をさらに強くしている。

（東大山の会、日本山岳会会員、小松短期大学長）

〝不肖の弟子〟として梅棹先生を偲ぶ

本多勝一

去年七月六日午後。梅棹忠夫先生が逝去と、『週刊金曜日』編集部から電話。テレビを見ていて知ったとのことです。つづいて二、三の探検部ＯＢからも電話。

そうか。梅棹先生もついにか。

電話をきって書斎の椅子にそのまますわっていると、学生時代やそれ以後も含めて、先生のご自宅で朝まで語りあかしたり、スキーにご一緒したりのときの風景や面影などが、数十年を経て無秩序に浮かんでくるのでした。

「ついに」というのは、梅棹先生は六六歳で失明したにもかかわらず、講演・対談はもちろん随筆や評論までも著しつづけて二十余年も活動してこられたからです。事実として九〇歳でご逝去になるほんの一年前の一昨年七月、先生は『山をたのしむ』という新刊を「山と溪谷社」から刊行されています。そこで探検部OBを中心に同年八月二〇日、この本の出版記念会を大阪の千里阪急ホテルで開きました。想えばこれは、去年亡くなられる一〇カ月ほど前に当たるわけです。記念会の冒頭で挨拶をさせられて、話がヘタな私は困りましたが、およそ次のように語りました。

失明後も精力的な活動を展開

梅棹忠夫先生にお世話になった年月や仕事上のご恩について語ればキリのないことになりますが、ここでは先生から私が最も強い影響をうけた部分にしぼって話したいと存じます。

本日の集りには京大探検部のOBや関係者が多いわけですが、皆さん一人ひとりがそれぞれの分野で梅棹先生の影響をうけている筈です。私の場合、それは『日本語の作文技術』でした。最初これは講義として朝日カルチャーセンターでやったのが一九七四年ですから、もう三五年も前になります。この講義は朝日新聞社から一九七六年に単行本で刊行され、その第二三刷のあとからは文庫版になって、それも現在第三九刷になりました。ほぼ毎年一万部ずつの増刷です。

一方では老眼世代から「やはり活字の大きい普通の本を」という声が出て、それに応ずるかたちで講談社から四年前にまた「フツーの」単行本が出されました。この講談社版の「はじめに」（序文）から、梅棹先生の影響が大きいことにふれた部分を読んでみましょう。学校教育の授業では、教科書に文法はあっても作文「技術」はなく、それを個人的に教えてくれる先生もいなかったことのあとで次のように書かれています。――

〈ところが、大学生のときに特殊なかたちで文章技術の一部を教えられたことがあります。それは日本語だの外国語だのといった授業ではなくて、クラブ活動に関連してでした。どういうことかと申しますと、私たちが全国で初めて創設した「探検部」（京大）には顧問になっていただいた先生が五、六人いたわけですが、その一人に梅棹忠夫氏（のちの国立民族学博物館館長）がいました。梅棹氏は探検歴の豊富な方ですし、大学のすぐ近くに自宅もあったものですから、私たちはよくお宅を訪ねて、時には夜明けまで議論したり雑談したりしていたものです。その雑多な話題の中に、文章技術だのローマ字論だの日本語論だのがありました。ですから私の『日本語の作文技術』の中には、もとをたぐればそのころの梅棹サロンにいきつく部分がかなりあるかもしれません。

それにしても、考えてみれば当時の梅棹氏は私のいた大学の先生ではなく、大阪市立大学の助教授でした。私たちにとっては、あくまでクラブ活動での顧問ですから、大学で教えられたことにはなりません。となりますと、やはり私は「小学校から大学まで」一貫して「作文技術」は教えられなかったことになります。こう見てきますと、むしろ本当の作文技術を教えているのは、日本語教育の分野では反主流か非主流の人たちではないかと言えそうです。そういえば梅棹忠夫氏にしても、いわば〝正統派〟たる「国語学」畑の出自では全然なく、無関係ともいえる理科系のご出身でしたね。（私も理科系でしたが。）

今回あらためて前記『日本語の作文技術』で梅棹先生のお名前を調べてみると五カ所に出ていました。先生の影響は歴然としているわけです。この本は朝日新聞社の文庫版や元の単行本、講談社の単行本、さらに中学生版や著作集版も加えますと、全部では一〇〇万部近くになるかもしれません。こうなりますと、梅棹先生のほうにまさに「足を向けて寝られない」ことになって、そのご恩は学生時代以来ずっと受けつづけていることにもなりますね。今夜お集まりの諸氏も、それぞれの分野でご恩を感じておられることでしょう。

そのような梅棹先生が、六六歳で突然視力を喪失されたときは、私もお見舞に参上したものの、言葉にあらわせないほどの驚きと、見えぬ原因への怒りを覚えました。あまりに多才な「知の狩人」に、カムイ（神）が嫉妬

したのかもしれませんね。

にもかかわらず先生は、そのまま大冊の著作集全二二巻を完結させ、最近は浩瀚（こうかん）な著作目録さえ刊行されました。さらに今回の『山をたのしむ』です。その衰えを知らぬ創作力には、視力喪失のときとは逆の意味で大きな驚きを覚え、かつその〝筆力〟にも感嘆せざるをえません。

本日はかくなる梅棹先生の新刊を祝し、同時にかわらぬご健康を願って、それでは皆さん、乾杯！〉

ギリシア時代のソクラテスと学派を連想

冒頭の「ついに」にもどれば、より大きな意味として、小学生以来ですと大学までの二〇年間にお世話になった先生がたのなかで、自分の生涯に最も深くて強い影響を及ぼして下さった、そのような先生もついにという感慨でもあります。

私たちの世代は旧制中学と新制高校のあわせて六年間おなじ学校にいたわけですが、その間には強い影響をうけながら反発したり憎んだりした先生もいました。しかし大学時代は梅棹先生にひたすら教えられるばかり、それも「学問」だの「人格」だのといった〝高度な〟レベルの領域だけでなく、じつに何もかもの話題による雑談・雑学でした。ちょっとギリシア時代のソクラテスとその学派を連想しますね。そしてその中に「作文技術」もあったわけですから、まとまったかたちでの話や議論では全然なく、時間的にもある夜はその部分が二〇分から三〇分、別の夜は一時間から二時間といった気ままな雑談でした。

そもそもの発端から言えば、私は信州・飯田高校のクラブ活動で生物班と山岳班にいました。ですから高校で講演を聞いて感銘を受けた遺伝学者・木原均教授のいる京大の農林生物学科を受験して、入学するや一回生から山岳部にもはいったわけです。それが一九五四年、これは京大カラコルム＝ヒンズークシ学術探検隊の出る前年でした。

梅棹忠夫先生に初めてお会いしたのは、この探検隊に加わっていた先生が帰国された直後の一九五五年一一月二六日夜、私が二回生のときです。前述『旅立ちの記』の28章「ヒマラヤ計画の推進」から引用すれば――「（ヒマラヤ）計画を部の行事に移したとたんに一部若手ＯＢから出はじめていた反対論にいらついていた私たちにとって、このときの梅棹氏の意見にはまことに勇気づけられるものがあった。それは岩村教授のいう『若者がどんどん海外に出て体験をつむこと自体が重要』とする考えかた、要するに『出ること自体に意味がある』ことをさらに熱心に説いたもので、このころ梅棹助教授が語った言葉を連絡ノートや私個人のメモから引用しよう。

『……いずれにせよ、来年の計画はぜひ実現することだ。問題は山に登ることよりも、〈外国旅行法〉の経験をつむことにある。日本にひとりでも多くそのような経験者が増すことが大切なのだ。（中略）国を出ることだけが主題（テーマ）であってもいい。否、出ることが問題なのだ。そのような者が出ない限り、いつまでたっても次の第二ステップを出せるものではない。山でいえば、八〇〇〇メートル級に行きうる実力がつくまで出ないのでは、八〇〇〇メートル級は永久に登れない。探検も全く同じこと、……』」

梅棹先生のこの〝扇動〟こそが、以後の私たち若手山岳部員のガムシャラな前進の柱となり、かつまだ海外旅行が自由化されていなかった一九五六年当時の日本で、新しく「探検部」を創設してまで出国するに至る源泉ともなったと言えましょうか。

幅広く夜明けまで語りつづけることさえ

そして、「一部若手ＯＢから出はじめていた反対論にいらついていた私たち」（前述）に関しても、梅棹先生の助言は「そんなＯＢなんかとは訣別（けつべつ）せよ」でした。やはり『旅立ちの記』から先生の言葉を借りれば――「いったい、なぜ『ＡＡＣＫ（京大学士山岳会＝ＯＢの組織）がバックにならなければexpeditionができない』なんて言わせておくのか。どこにそんな根拠があるのだ。その観念はすぐに捨ててしまえ」

結局はその結果が、山岳部ＯＢとの関係の面倒くささも手伝って、現役が探検家ＯＢとの絆（きずな）を太くする方向へと動き、まずは「探検講座」を開きます。『旅立ちの記』から部分を引用しますと――

「二回生を中心とする海外遠征推進派は、今西錦司先生を中心とする探険家たちの協力を得て、（一九五六年）一月二〇日から週一回の『第一回探検講座』を五週にわたって主催した。講師とテーマは今西錦司（イントロダ

クション）・中尾佐助（資料写真）・川喜田二郎（フィールド＝ノート）・桑原武夫（探検と国際関係）・梅棹忠夫（異民族との接触）・藤田和夫（探検の準備）」

こうした講師陣たち、とりわけ今西・梅棹・川喜田といった先生方は大学から家が近いせいもあって、私たちは三、四人から多いときは七、八人もで夜たずねては、夜明けまで語りつづけることさえ珍しくありませんから、夫人がよく夜食を出してくれました。

想えば、小学校から大学までの全教育期間・全教育機関を通じて、この「探検講座」や先生方の自宅での語らいほど真の意味で勉強になったことはありません。それは探検や学術調査についての基本的考えから具体的方法論についてはもちろんのこと、より広く「ものの考えかた」や人生哲学にも及び、とくに梅棹先生の家では話題もローマ字論から文章論・文明論・国際語論など、いつもきりもなく間口の広い内容になりました。

このような情況――せまい意味ではアルピニズム派ＯＢとの路線のちがい、広い意味では探検の潮流の台頭がすすむうちに、スポーツ団体としての山岳部と全く無関係な新しい文化団体を結成するほうが、なにかと実現しやすいという確信を私たちは抱くようになります。

その結果、一九五六年三月二日午後六時半、第一回探検講座の最終会。講師をつとめた五人のほかサル学の新鋭たる伊谷純一郎氏もはいり、他方アルピニズム派の若手ＯＢと現役山岳部員も加わって、せっかくのこの探検講座を今後発展させるにはどうすべきかを議論しました。

日本の大学では最初の探検部を創立

まず梅棹先生が、五週間にわたった講座のしめくくりとして、自分たちの学生時代の海外遠征の経過を解説します。吉良竜夫氏などもふくめた五人に今西先生を加えて「ベンゼン核」と称し、初の海外舞台としてポナペ島（一九四一年）に行くまでの苦心談です。そして（旧制）三高山岳部の中で生まれた探検派としてのベンゼン核が、発展して本当に海外探検に出るまでの様子は、奇妙というか一種ふしぎなことに、私たちが現にぶつかっているさまざまな問題のアナロジーにもなっているのです。〔ひとこと注釈しておきますと、梅棹氏らの世代がオクスフォード大学探検部の学生・ジノ＝ワトキンス（極地探検のリーダーを何回もつとめたが二五歳で遭難死）を夢想していたように、私たちには梅棹氏らの学生時代の『大興安嶺探検』（一九四二年）が具体的憧憬の姿でした。〕

梅棹先生の話が一時間余りつづいたあと、今後の問題に移りました。この探検講座をさらに発展させるためにはどうすべきか。……以下はまた『旅立ちの記』から――

「議論は次第に探検部独立案に傾き、アルピニズム派ＯＢからの反対論も激しかった。長い討論の末、結局は路線のちがいが確認され、午後九時半になって次のような結論に達した。――『たがいに了解の上で以後二つの部が存在すればよい。登山を主とする山岳部

1956年３月２日夜10時、学生文化団体「京大探検部」が発足したときの記念写真。前列に座っている顧問団は左から伊谷純一郎・藤田和夫・梅棹忠夫・今西錦司・川喜田二郎・中尾佐助（本多は右上の隅で暗く顔だけ写っている）京大楽友会館にて

と、探検を主とする探検部と。もはやこれ以上論議の余地なし。』」

名称もあっさり「探検部」として、新しい文化団体なので直ちに大学当局へ申請することを決めました。午後一〇時、記念写真をとって解散。このとき山岳部から分封して探検部員となったのは一一人。初代プレジデントは五回生の高谷好一、顧問は今西先生以下の探検講座講師陣五人。

日本では最初の大学探検部となりましたが、世界ではイギリス（オクスフォード大学）に先例がありました。イギリスでもロンドン大学では私たちと同じくこの年（一九五六年）に創立されています。このように、梅棹先生には探検部創立の当初から中核的役割を担っていただいたわけです。三ヵ月後には、創設されたばかりの探検部から、戦後日本で初の現役学生による探検隊が二隊出発します。その一隊（パキスタンのヒンズーラージ）に私も加わりました。

助言を実行した『極限の民族』取材

新聞社に私が就職して以後も梅棹先生との交流はつづき、札幌（朝日新聞北海道支社）にいたころは先生が北海道にきたとき拙宅で夕食を共にできたし、東京に転任してからも同様でした。逆に私も家族づれで京都の梅棹家を訪ねたことがあります。長男は小学生でしたが二男は幼稚園児か、ともかく夏休み中のことでした。お連れ合いの淳子さんが「とり鍋」の夕食としてトリと大根の水だきをご馳走してくれたものです。

梅棹先生に仕事上のご協力をいただいたのは、私にとって最初の海外での大仕事となった一九六三年の「カナダ＝エスキモー」取材でした。これについては、新聞連載のあと一九八一年に文庫版（朝日文庫）になったさい、梅棹先生が九ページにわたる解説を書いて下さった中に次のような一文があります。

――

「一九六三年の春、わたしがアフリカ学術調査の準備にいそがしくしていたころ、かれは京都のわたしの家にやってきて、エスキモーやるからアドバイスがほしいといった。そのときわたしは、どんな内容のことをしゃべったか、すっかりわすれてしまったが、かれは克明なノートをつくっていて、のちにそれをくわしくしるしている。（『ルポタージュの方法』朝日文庫）。その後かれの仕事ぶりをみると、わたしのいったことをまことに忠実に実行しているのである。」

これは私が就職後しばらくしたころ、先生の〝弟子〟と称してよろしいかと承認を求めたことと関連します。右の解説からもう一ヵ所引用しますと――「わたしはいまの職（国立民族学博物館長）にうつるまえは、京都大学の教授をしていたが、人文科学研究所の所属であったから、学生をもっていなかった。講義もなかった。したがって、学部の教授のような意味での〝弟子〟はひとりもいないのである。それに、本多勝一が京都大学に入学してきたころは、わたしは大阪市立大学に籍があって、やはり制度的な意味では、かれとは師弟関係にはない。かれが、実質的にわたしに弟子入りしてくるのは、だから制度外のところにおいてである。」

その「制度外」が探検部顧問であり、先生のご自宅での語らいでもありました。のちに先生の代表的論文として〝一世を風靡〟したかのような「文明の生態史観」の類も、そんな語らいの中ですでに片言隻語の顔を出していたと思います。

その後私は、「ニューギニア高地人」だの「アラビア遊牧民」だのの『極限の民族』シリーズの後、ベトナム戦争を舞台とする『戦場の村』とか、南京大虐殺だのカンボジア大虐殺だのが取材対象となっていきましたから、直接的に梅棹先生との仕事上の交流に及ぶことはなかったでしょうが、取材の方法や基本的ものの考え方には、学生時代の先生の影響が陰に陽につづいていました。

小学生以来では、クラブ活動その他も含めておせわになった先生は一〇〇人を優に超えるでしょうが、その中でわが生涯をつうじて仕事上はむろんのこと、「基本的ものの考え方」にまで最も影響され、おせわにもなったのは梅棹先生だったと言えましょう。

梅棹忠夫先生、ほんとうに、ありがとうございました。

探検家梅棹忠夫先生の光彩

沖津文雄

エスニックな赤い布製のバッグを肩にかけ

梅棹先生が西部構内に現れた、前髪が少しゆれ、下向きかげんではあるが、鋭い目つきが印象的であった。先生がカラコルム・ヒンズークシ探検から帰国された直後のことであろう、赤いエスニックなバッグは現地で手に入れられたものにちがいない。先生との初対面であり、その後短い期間ではあったが、先生に接する機会は多かった。卒業後私は海外勤務が続き、先生が国立民俗学博物館を立ち上げ、さらに数々のご活躍をなさるのであるが、そのお姿に接する機会は残念ながら持つことはできなかった。ここに記すのはこの短い期間での私にとっての梅棹忠夫である。

私は一九五五年に理学部入学、その年に山岳部に入部した。カラコルム・ヒンズークシ探検隊はこの年に現地活動を行った。AACKのアンナプルナ遠征はその前であった。今西錦司氏など多くの方が京都を離れていたので、京都は静かなはずであったが、先輩の遠征が学生たちを刺激していたことであろう。しかしこの年に入学し、宇治分校で過ごしていた新入生には、そのような雰囲気はあまり伝わってこなかった。

一九五六年の年初から探検講座がはじまった。今西錦司氏、桑原武夫氏などの長老から中尾佐助氏、藤田和夫氏、川喜田二郎氏などの講師連の中で、この講座をリードしたのは梅棹先生だった。とくに講座が終了し、議論が将来の展望について及ぶと、探検部として独立することを提案したのも梅棹先生であった。講座において先生のテーマはたしか「異民族との接触」。これ本当に興味深く意味のあるテーマだ。

当時は英国の歴史学者トインビーの著作が広く読まれていた。わたし流に解釈するとトインビーは文明のEncounterを重要視していたようだ。Encounterも接触であるが、それはむしろ衝突のような遭遇である。戦いである。しかし梅棹先生がテーマとした接触とは、やさしく触れ合うこと。探検とは文明と文明とが直に触れ合うことである。少年時代から登山や探検活動に浸っておられた梅棹先生は、その経験から良好な接触の重要性を認識されたのであろう。

異民族との接触の重要性を教えられ、それを意識したことは私のその後の人生に大変大きな意味を持つことになる。わたくしはその後ずっと石油探しで海外勤務を続けたのであるが、梅棹先生の教えが貴重な助けとなった。この仕事を続けることができたのも、梅棹先生のおかげだと思っている。

また先生が僻地への旅行について、「普通の車でたいていのところへ行くことが出来る、むしろその方がいい」そして「英語を話せば旅行はできる」と話されたのも何時までも記憶に残る。わたしはそれを信じ、ドイツのフランクフルトからアラビアまでの自動車旅行を家族四人単独でドライブしたが、アルプスの峠を越え、イタリア、そして当時の共産圏からトルコ、中近東の砂漠を通過する旅行も、フランクフルトで購入した普通の乗用車と英語のみで問題なく終えることができた。その後解放前の中国でも個人単位で奥地を訪ねた。「通訳を伴わない旅行は無理である」と言われていた時代であったが、根気よく英語をしゃべっていると、どこからか英語が通じる中国人があらわれた。ホテルや食堂を探し、交通手段も確保し、目標の場所にたどりつき予定どおりの旅ができた。

あの当時のわれわれにとって梅棹先生は周囲を放射する光源のようなものであった。われわれはその放射に励起され、新たなる行動に移ったのである。その光彩は今もって失せることなく輝き続け、われわれを励ましているようだ。私にとって梅棹先生は今なお生きつづけられており、あのやさしい笑顔で接してくださっているのである。

最後に梅棹先生についてのエピソードを記し、この小文を終わりたい。カラコルム遠征隊は途中でヒンズークシ隊とカラコルム支隊に分かれたが、そのときの荷物分類の担当者は中尾佐助氏であった。このときに梅棹先生が日本から持参した抹茶茶碗が見当たらなくなり、中尾佐助氏が苦労して探し出したらしい。このことは梅棹先生が「中尾は茶碗をみつけ、なんだこんなものと地面にたたきつけた。茶碗はこわれた。」と中尾佐助氏への追悼文に書いている（梅棹忠夫、「山を愛する」中央公論社）。しかしその場にはもう一人のオブザーバーがいた。今西錦司氏である。今西さんから直接お聞きした内容はちょっと異なっていた。正確な再現ではないが、今西さんによると、

「遠征隊の荷物がヒンズークシ隊とカラコルム隊に振り分けられ、パッキングが完了し、中尾が〝これで完了や〟と言った時に梅棹が

〝おれの茶器がないやないか〟と中尾に迫った。中尾は苦労して探し、その茶器を見つけ出したが、梅棹に手渡すその時に茶器を手から落とした。茶器は壊れてしもた。中尾も負けとらんで、は　は　は。」

アジテーターとしての梅棹忠夫先生

山本紀夫

いまから四〇年あまり前の一九六〇年代後半のこと、梅棹忠夫先生はＡＡＣＫの会員であるとともに、京大探検部の顧問でもあった。その当時、探検部の部長であった四手井綱英先生（京大農学部教授）が顧問としての梅棹先生を非難されたことがある。探検部の部員であった私に次のように言われたのである。

「梅棹はひどいやっちゃ。探検部の学生をおだてるだけおだてといて、あとは面倒をみよらへん」。

ただし、この批判の真意を当時の私は十分に理解できたわけではなかった。未だ梅棹先生とさほど密接な関係がなかったからだ。たしかに、私は梅棹先生が自宅を開放し、探検や登山、そして学問などについて議論する私的な集まりである「梅棹サロン」に顔を出していたが、それは探検部の顧問と部員という関係の域をこえるものではなかった。むしろ、顧問としては、中尾佐助先生の方が研究室の先輩であり、私が関心をもっていた農耕文化研究のパイオニアであったため影響ははるかに大きかった。

とくに、中尾先生が一九六六年に刊行した『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書）は私にきわめて大きな刺激を与えた。この本を読んだことがきっかけとなり、その翌々年の一九六八年に私は探検部で学術調査隊を組織して、アンデスにおける栽培植物と農耕文化の調査に出かけたのである。そして、この調査のあと、私は南アメリカの研究の道に進むことを決意する。

とはいえ、当時、海外調査は容易でなく、とりわけ日本から最も遠い南アメリカへは行くだけでも大変であった。私はすでに大学院生になっていたが、大学院生の身分でも当時は海外調査の機会がなかなか得られなかった。そのため、私は某新聞社が主催したアンデス登山隊に参加したり、アマゾン探検隊にもぐりこんだりして、なんども南アメリカに向かった。また、現地では、一日でも長く滞在して調査をするために、食費を削ったり、交通費を節約するためにヒッチハイクをして旅をつづけたこともあった。そんな無理がたたったのか、現地でも、帰国してからも、しばしば疲労や病気などで入院を余儀なくされたり、借金にも苦しめられた。

そんなとき、よみがえってきたのが「梅棹はひどいやっちゃ。あとは面倒をみよらへん」という四手井先生の言葉であった。というのも、探検部のアンデス調査こそは私が籍をおいていた農学部らしい農学的なものであったが、やがて私は農学から人類学へ関心を移すようになっていたからだ。そして、それは梅棹サロンや人類学の自主講座「近衛ロンド」（京都大学人類学研究会）などを通しての梅棹先生の影響にほかならなかったのである。

梅棹先生自身も、梅棹サロンをひらいていた当時のことを振り返り、次のように述べている。

「実は、自宅に若者を集めて、（京大に人類学科を作るために）、その芽を育てていたのです」（『梅棹忠夫に挑む』中央公論社、二〇〇八年）。

また、同書では、探検部の顧問としての時代を振り返ったと思われる、以下のような記述も見られる。

「……若い人から探検や調査の相談を受けると、計画段階から助言をして『ともかく行ってこい』と、どんどん外国に送り出した。アジテーター（扇動者）としては成果をあげたと思います」。

たしかに、私のまわりの人たち、とりわけ探検部の仲間や先輩の中には、梅棹先生にアジられて海外調査に出かけ、人類学に転向した者が少なくなかった。そして、私自身もその例外ではなかったのである。

しかし、念のために述べておくと、梅棹先生は「そんな探検部のＯＢたちの面倒をみなかっ

た」わけではない。それを後には四手井先生も認めておられたようだ。そのことを知ったのは、梅棹先生が国立民族学博物館（民博）の初代館長に就任してから数年後の一九七七年一〇月一日、民博の建物が完成し、その披露式典がひらかれたときのことだ。その前の年に民博に赴任していた私は、披露式典に招待されていた四手井先生に久しぶりに会った。そのとき、四手井先生が真っ先に私に言われた言葉がある。それが、次のものであった。

「梅棹はえらいやっちゃ。ちゃんと探検部OBの面倒をみよった」。

実際、当時の民博の研究部スタッフは四〇名ほどだったが、そのうちの一割をこす六名のスタッフが京大探検部のOBであり、しかも梅棹サロンや近衛ロンドの常連であった。みんな、梅棹先生に扇動され、考古学や地理学、さらに薬学や農学などの異分野から人類学に転向してきた者たちだったのである。

こうして振り返ってみると、かつてのAACKや探検部は卓越したアジテーターに恵まれていたようだ。ここで述べた梅棹先生や中尾先生だけではなく、川喜田二郎さん、今西錦司さん、西堀栄三郎さんなどの言動や著作を通して登山や探検、さらにフィールドワークの道に進んだ者が少なくないからである。そして、そのようなアジテーターのおかげがあったからこそ、かつてのAACKや探検部の活発な活動もあったのではないか。学生時代から長く接してきた梅棹先生の逝去は、私にそんなことを強く感じさせたのであった。

いろいろ知恵をつけてくれはった梅棹さん

岩坪五郎

当初、梅棹さんからわたしは白眼視されていた、とおもう。それは探検部主催のスワート・ヒマラヤ遠征隊に、今西錦司さんとボス交をやってもぐりこんだとおもわれていたからのようだ。そののちだんだん白眼は青味を帯びてきたようにおもう。チョゴリザ遠征隊の座談会形式の報告書の編集を梅棹さんがしていた時、〝岩坪〟というのが出てくると、こいつまたおもろいことをしゃべりよるぞ、と顔がニタッとしてくる、といわれた。わたしはうれしかった。ニタッは白眼ではできないだろう。

今西錦司さんの登山のお供のように登山に同行したことはいちどもない。次の遠征のための文書の校閲などを通じて、AACKについての、社会全般についての知恵を、つまり生態史観をならっていた。感銘をうけたトピックをひとつ述べる。登場する人たちはみなすでになくなられているからいいだろう。

一九七二年、ついにネパール政府から、ヤルンカン登頂の許可がきた。AACKは防災研助教授の樋口明生（以後、ジャン）を隊長に想定して準備を始めた。梅棹さんも人文科研の教授として助成金獲得などに努力したけれども、うまくいかない。隊長が助教授では、金銭がうごきにくいのである。大学では人は教授であると痛感した。四手井綱英会長は外遊中である。困り果てた近藤良夫副会長と理事会は、今西錦司さんに支援を求めることになり、ジャンについてゴローも今西邸を訪問した。

話をきいた今西さんは、これは西堀栄三郎さんにでてもらおうといって電話をかけ、明日午後一時、ジャンをやるから話を聞いてやってくださいといった。つづいてわたしたちに、午後一〇時、加藤泰安（タイアン）さんを会社に訪問し、隊長就任を要請しろ。えっという顔をするわたしたちを無視して今西さんはつづける。タイアンは今、体調がよくないから就任できないという、それではわたしたちに同道して西堀さんに隊長就任をたのんでくれというのだ。わたしはタイアンさんがその場では隊長就任を拒絶しない可能性をのべたが、今西さんはとりあってくれなかった。ただゴロー、おまえのほうがジャンよりずるがしこいから、いっしょに行けといった。

翌日、午前一〇時、わたしたちはタイアンさんを社長室にたずね、現状を報告し、今西さんがタイアンさんに隊長就任を依頼しろといっているとのべた。その時の泰安さんの喜色満面の顔たるや……。タイアンさんの身体の調子はどうですか、出発が迫っている時間がないがとのわたしの質問に、早急に医師た

ちと相談し、今西さんには自分から連絡すると繰り返すばかりであった。わたしはタイアンさんを敬愛していた。この人の喜色満面の顔に、ほんとうのお願いは、午後一時、西堀さん説得に出むいていただくことなのですとは言えなかった。ついに私は、しばらく時間をくださいといって、会社を辞した。

そして公衆電話から、岐阜大学長室の今西さんに電話し、現状を申し述べた。それにたいし、〝ばかもん〟の一声で電話はきれた。しかし、わたしにはタイアンさんを説得するのにこのひと声が必要であった。実情についてのわたしの説明を聞くや、タイアンさんの顔は、これまでの親しみやすい山岳部の先輩の顔から、あくまで誇りたかい上級武士の顔に一変し、〝わかりました。西堀さんへの依頼に同行しましょう〟といった。敬愛する大先輩をだまし、侮辱するたちばになったわたしは、よろしくお願いしますという以外に言葉をもたなかった。

午後一時の西堀さんの対応もみごとであった。京都から今西の指示をうけたジャンとゴローが来て隊長就任を要請し、さらにヒマラヤ登山指揮のエキスパートであるタイアンの要請をうけて、わたしは断る立場にはありません。了解しました。というものであった。

京都に帰って、わたしは梅棹さんにこんどの事態の解説をおねがいした。今西さんはなぜ、タイアンさんをあんなひどいめにあわしたのだろうか、と。梅棹さんの解説は、ごく簡単なものであった。今西さんとタイアンさんは、おたがい心から信頼し合った山仲間である。ヤルンカンの隊長就任を要請することで、自分はタイアンが最も隊長にふさわしい男であることを忘れているわけではないことをしめし、タイアンさんはそれを受け止めたのだという。明治の人間と昭和の人間の違いだろうか。わたしならもっと柔和にウエットにわが意をつたえるとおもうのだけれど……。

一九五八年チョゴリザ隊は桑原さんが隊長で、登攀指揮はタイアンさんがとった。一九六〇年ノシャックは酒戸隊長、結果的には登ってしまったが、これは偵察隊であった。一九六二年サルトロカンリのとき、タイアンさんはいよいよ自分の番だと思っただろうけれど、今西さんは四手井さんを隊長にするために、タイアンさんに再び副隊長を要請せざるをえなかった。ヤルンカンは八五〇〇米を越え、その登頂ルートは複雑である。今西さんは、タイアンならやるだろうとおもい、タイアンさんも自分ならやれるぞと思ったに違いない。この二人の男の心の会話を、さらにそれを理解する西堀さんの心情をさっと解説してくれたのが梅棹さんであった。

日本人が実現した最高の未踏峯ヤルンカンの登頂を舞台に今西、西堀、加藤の三人のボスザルたちのパーソナリティを文明の生態史観の立場で解説してくれはった梅棹センパイザルに感謝の気持ちをあらわし、追悼としたい。

梅棹さんの登山とＡＡＣＫ

斎藤清明

梅棹忠夫先生から最後に話をうかがったのは、逝去される三ヶ月半前の三月一八日（木）（二〇一〇年）のこと。その十日後に民博で川喜田二郎先生（梅棹さんよりちょうど一年前に亡くなられた）を偲ぶ研究フォーラム「ヒマラヤ研究と川喜田二郎」があり、梅棹さんと吉良龍夫先生にも参加していただくことになっていた。しかし、梅棹さんが出れそうにないとのことで、フォーラムへの梅棹さんのメッセージをお聞きすることになった（吉良さんは出席され、はっきりとお話されたが、その後に体調を崩された）。

民博の梅棹資料室で、昼食をいただきながら、梅棹さんは中学生のときからの川喜田さんとの長い付き合いを語られた。それはまた、梅棹さん自身の登山をめぐる回想ともいえるので、まずそのあらましから。

川喜田とヒマラヤ

川喜田は最も優れた友人のひとりです。非常に独創的な人間だった。

京都一中の一年からのつきあいや。彼は（京都師範）付属小学校からきた。下鴨の大きな家で、庭にロックガーデンもあった。その離れの二階に同級生たちが集まって、よう遊んだ。

一中では博物同好会でいっしょになった（同好会の会誌を秘書の三原さんに見せてい

ただいた。第三号（一九三三・一・一）に川喜田「植物の垂直（1）」、梅棹「水に棲む昆虫」が掲載されている）。夏の合宿で北山に行って、それからや山岳部に入ったのは。

「山城三十山」をみんなで登った。その最後が峰床山。日帰りがむつかしいので、川喜田のところが使っていたタクシーでいった。金持ちやったからな。往きは花脊峠、帰りは山国、周山にでて高雄をまわって。運転手には大悲山口で釣りをしながら待ってもらって、残雪を利用して登った。

三高でも山岳部でずっといっしょやった。仲よう落第もした。よう山いったなあ。北海道にも一緒に行った（山名を次々にあげられた。コロポックルの話も）。そのとき海水で飯炊いたけど、食えなんだなあ。

白頭山を越えたとき、頂上の寺に川喜田が手紙を置いておくことになっていたが、無かった。来れなんだやなとおもった。

今西さんにリーダーになってもらうとき、川喜田は今西さんの一の弟子で、家も近所やから、呼んできてもらった。農学部の前の「ふくや」で、今西さんは「引き受ける」といってくれた。

戦後、中国から引き揚げてきて京大大学院に復帰したとき、川喜田の口利きで東海大学予科の講師を二年間やり、その後、大阪市大に決まった。川喜田も。そのころ北白川に家を買ったら、中尾が「京都に戻って来るつもりやな」といいよった。

マナスル計画のときは、本気でヒマラヤに行くつもりやった。（日本山岳会に委譲され）科学班で中尾と川喜田が行ったが、病気でなかったら当然自分やとおもってた。「もし、ヒマラヤ行ってたら」とたずねると、「民博はなかったかもしれんな」「チベット・ジロー（シャンソン歌手のイベット・ジローをもじった、川喜田さんのこと）みたいに」とも。

登山家・梅棹

梅棹さんの最晩年の著作は『山をたのしむ』（二〇〇九年　山と渓谷社）。それまでの山と探検をテーマにした著述は、「梅棹忠夫著作集」の第一巻『探検の時代』と第一六巻『山と旅』に収められ、それ以降の登山に関連する原稿や講演、座談をまとめたもの。「山はわたしの人生のルーツであり、すべての出発点なのである」とする「終生登山家」を序にかかげる。

梅棹さんは京一中に入学し、昆虫採集で訪れた北山のとりこになる。「この北山で、山をたのしみ、自然をいつくしむことを全身でまなんだ」。当時、京一中や三高の山岳部の関係者のほかは、北山に山歩きに出かける人は少なく、開拓時代の雰囲気をあじわい、「山城三十山」の完登と『山城三十山記』の編集執筆もやりとげる。

三高山岳部時代は登山に明け暮れた学生生活。ロッククライミング、積雪期のアイゼンやスキーの技術、沢登りなども含め、多種多様なオール・ラウンドで本格的な登山技術を身につけた。初めて日本アルプスに出かけた入部一年目の終わりには、上級生と「春の黒部源流」行ができるまでに成長し、優秀な山岳部員だった。入部三年目にはプレジデントをつとめる。冬山の経験のない部員を率いて八ケ岳の氷壁に挑んだりもしている。

山に打ち込んだために二回も落第し、二年生を松竹梅の三回経験した。やっと三年生になった入部五年目に決行したのが白頭山行。この山行は探検への転機となったものだが、それまでの三高山岳部での実績が花開いたといえよう。この五年間の三高山岳部で、梅棹さんは登山家に育った。

ところが、本格的な登山は三高山岳部時代だけ。「一九四一年に京都帝国大学に入学してからは、わたしは登山家というよりは探検家としての人生航路をたどったので、大きな山ゆきには参加していない」。剱岳や穂高にも登っていない。それにもかかわらず、この三高山岳部五年間の実績をみれば、オール・ラウンドな正統派の登山家といえよう。スキーは正統派のアール・ベルグ派であった。

梅棹さんの人生において、「探検の時代」の前に「登山の時代」があり、「登山こそはその後のわたしの生涯の真の原点だった」「青年時代には登山家をこころざしながら、現実には登山よりも探検の道をあゆんでしまった。しかし、山へのおもいがきえさったわけではない」。晩年になっても、山へのおもいがつのり、著作になっている。

ヒマラヤへのおもい

戦後にできた京大山岳部は、三高山岳部や京都帝大旅行部、ＡＡＣＫといった戦前からの組織とは別で、発足当初の主力は三高山岳

部出身者ではなく、各地の旧制高校で鳴らしてきた連中たちだった。梅棹さんはＡＡＣＫに戦前の最後（一九四三年）に入会していたから、どこの馬の骨の連中やとおもったという。やがて「マッキンレー論議」で現役たちと初対面する。

「ヒマラヤへ行きたいがまだ無理。マッキンレーなら手っとり早く行ける」という伊藤洋平（八高出身）、藤平正夫（富山高出身）さんたちに、梅棹さんは「なぜヒマラヤをめざさないのか」と。学生たちが夢物語と思っていたヒマラヤを、目の前に突きつけた。この会見をきっかけに、京大山岳部の現役から四十歳半ばの今西錦司さんまで、オール京大のヒマラヤ計画が進められる。そして、梅棹さんもその中心メンバーとして働く。その後に再建されるＡＡＣＫの活動につながり、方向付けをしたといえよう。

この、進々堂での梅棹さんと京大山岳部の精鋭たちとの「マッキンレー論議」の際に、梅棹さんがテーブルをたたいて激怒したという伝説がある。梅棹さんはそんなこと覚えてないというのだが、きびしい登山論議が交わされたのは事実のようだ。大学院生の梅棹さんと三、四年後輩たちという、血の気の多い連中の論争だった。藤平さんによると、梅棹さんは「君ら、そんな山登りしておって、雨の中で焚火を焚けるのか」と問い詰めた（ＡＣＫ時報十号「ＡＡＣＫと山岳部の戦後」）。氷雪や岩ばかりの登山ではだめだという、正統派登山家梅棹の考えである。藤平さんはむっとして、「山を広い意味でつかんでいます」と答えたが、登山についての考えの食い違いを感じたという。先鋭的な登山をしている現役を相手に、登山論で一歩も退かない梅棹さんの自信のあらわれだった。

京大のヒマラヤ計画はマナスルを目標にして進み、やがて日本山岳会に委譲される。梅棹さんは日本山岳会に入会する。ヒマラヤに行くつもりだった。ところが、結核にかかってヒマラヤを断念。健康だったらおそらく隊員に選ばれていたはず。もし、梅棹さんがこのときヒマラヤに行っていたら、どうなっていただろう。登山家の道に戻ったかもしれないし、マナスル登山隊科学班の川喜田さんのようにヒマラヤのとりこになってしまったかもしれない。

前号のニュースレターで谷泰さんがカカボ・ラジ計画の裏話を記しているが、もし実現していれば、梅棹さん念願のヒマラヤ登山になったことだろう。カカボ・ラジはネパールを中心とする狭い範囲のヒマラヤからは東に外れているが、パミール高原からはるかに連なっている大ヒマラヤの東端に位置しているのだから。

チョゴリザ（一九五八年）、ノシャック（一九六〇年）の初登頂に続くはずであったカカボ・ラジは、登山家の入ったことのない地域にあり、「探検大学」の京大にふさわしい、探検的登山の対象。梅棹さんは、ビルマでの学術調査をめざす大阪市立大学との合同隊の隊長として、登山と探検の両方ともやるつもりだった。自ら書いた計画書「カカボ・ラジ登山探検計画」に、その意気込みがあふれている。若き日の大興安嶺探検のような興奮を味わったっていたにちがいない。今回は隊長で、しかも優秀な若い登山隊員を率いている。きっと登頂できると。

ところが、計画だけで終ってしまった。梅棹さんの隊長としての手腕がいかんなく発揮されたはずなのに。残念やったなあと、晩年になってからもよくもらされていた。

歴史は自ら書け

ＡＡＣＫの「五十年史」を私が書くことになって、梅棹さんに相談にうかがったときに、「われわれＡＡＣＫの歴史は、自分たちで書かへんと、誰も書いてくれへん。社史みたいなもんやなしに、売れるものを書いてや」といわれた。

きびしい励ましであり、梅棹さんの思想がはっきりしているとおもった。ＡＡＣＫとその会員たちは、登山や探検で、パイオニアとして色々な活動をしてきた。後世に残る仕事もやってきたと自負している。でも、それを自分たちの手できちんと書き記しておかないとだめだ。誰かが書いてくれるなんて考えるな。自分たちの歴史は自分たちで作るんや。しかも、同窓会誌や社史みたいに内輪だけに通じるものではなしに、一般の読者を対象にした本にしろ、というのである。

「五十年史」はやがて、今西錦司編『ヒマラヤへの道』（中央公論社、一九八八年）として出た。ＡＡＣＫの名は小さく、サブタイトルで「京都大学学士山岳会の五十年」になった。梅棹さんの期待に添えたかどうか、自信

はなかった。もうそのときには失明されていたが、本を手にとって「立派なもんや」といわれたときは、ほっとした。

梅棹忠夫さんとの出会い

栗田靖之

一九六二年五月のことであった。岡崎に三高会館という和風の建物があり、そこでAACKの集まりがあった。そのあとの懇親会で同じすき焼き鍋を囲んだのが梅棹忠夫さんであった。梅棹さんはその年の二月、大阪市立大学東南アジア学術調査隊に参加したあと単独でビルマ、東パキスタン、インド、ネパールを旅行して帰国したばかりだった。その席で、「君が栗田か。カトマンズのスノー・ビュー・ホテルに泊まったとき、ボーイが先日クリタという日本人の若者がきて、私の写真を撮ってくれた。その写真を送ってほしいと言っていたぞ」という話をされた。私は文学部の学生であったが、授業をさぼっては山登りにうつつをぬかす山岳部員で、その前の年にインド、ネパールを一人で旅行していた。そのとき、たしかにカトマンズのホテルでボーイの写真を撮った。しかしその写真は八ミリ・ムービーで撮ったものであり、焼き付けた写真にすることはできないとボーイに話していたのに、彼はそのことが理解できなかったらしい。

そのことを話したのが梅棹さんとの最初の出会いである。梅棹さんが四十一歳、私は二十二歳であった。

梅棹さんは一九五六年、京大に探検部を創立していた。私は山岳部で、探検部とは直接の接触はなかった。しかし梅棹さんは、一九六四年、山岳部がアンナプルナ南峰へおくった遠征隊の報告書『ガネッシュの蒼い氷』の原稿に、夜を徹して手を入れていただいたと木村雅昭さんから聞いた。

一九六五年、梅棹さんは京都大学人文科学研究所の助教授になった。一九六七年、いちど人文研の研究会で発表しないかと言われ、研究会への参加が許された。当時、人文研ではヨーロッパ学術調査隊の派遣を計画していた。私には、先進地域であるヨーロッパを、フィールドワークの対象とすることが腑におちなかった。そこで梅棹さんにどういう仮説でヨーロッパを調査するのかと聞いた。そのとき梅棹さんは「仮説があってその検証に行くのなら、なにもわれわれが行く必要はない。ヨーロッパの人に手紙を出して聞けばいい。ヨーロッパへ調査に行くのは、行って見てみないと分からないものを探しに行くのや」と言われた。なるほどこれがフィールドワークの神髄だとおもった。

人文研の梅棹共同研究会には谷泰さんも参加しており、刺激に満ちたものであった。一番の面白さは研究員が喧々諤々と議論していく中で、学問が組み立てられてゆくことであった。

一九七三年、AACKに「国際登山探検文献センター」を設立することになった。私が担当する理事となり前田司さんとその事業をはじめた。その設立趣意書の添削を梅棹さんにお願いした。梅棹さんの研究室で、下書きしていった趣意書を徹底的に書き直された。主語を明確にすること、できるかぎり平明に短い文章で書くこと、訓読する漢字をなるべく使わないことなど、本当に手をとって教わった。また梅棹さんは、その資金を日本万国博覧会記念協会から獲得することに尽力してくださった。

一九七四年、梅棹さんは創設された国立民族学博物館の館長になった。そして二年後に私は「民博に来ないか」と誘いを受けた。

私が民博に着任したのは一九七六年一〇月である。それ以来、多忙な館長の仕事の間に、梅棹さんとは、いろいろと山と山仲間の話をした。その中でも印象に残っているのは、梅棹さんは、終始「私は三高山岳部のメンバーであったが、京大山岳部のOBではない。京大山岳部とは無縁の存在だ」と話されていたことである。それは新制の京都大学山岳部には、あえて困難な岩壁を登ることだけを志向する新しいアルピニズムの考え方があったからである。梅棹さんはそのような山登りには組しなかった。みずからも会員であるAACKの中に流れている、山全体を対象として、山を抱きかかえるように山を登ろうとした精神に大きな共感をもっていた。それは梅棹さんが終生、偉大な先輩として仰いでいた今西錦司さんから受け継いだものであった。

民博には評議員会という最高意思決定機関があった。評議員会の会長は桑原武夫さんで、

今西錦司さんと中尾佐助さんが評議員会のメンバーであった。民博の根底には、梅棹さんと山仲間たちの、民博を支えようとする同志的結合があったと思う。

梅棹さんとの関係の中で忘れられない人がいる。それは梅棹さんの学術秘書ともいうべき宇治日出二郎さんである。当時、宇治さんは千里文化財団の調査・研究部門を担当していた。千里文化財団には、いろいろなプロジェクトの企画が依頼された。それはとりもなおさず梅棹さんへの企画の依頼であった。そのようなときに若手の研究者が呼び集められて「知恵出し会」と呼ばれる研究会が行われた。その研究会では、梅棹さんや若手研究者が自由に議論を交わした。一週間もすると、われわれが自由奔放に話したことが、じつに見事な筋の通った報告書となって出来あがってきた。それは研究会に司会役として参加していた宇治さんがまとめたものであった。このようなことができたのも、宇治さんが梅棹さんの考え方を、ふかく理解していたからだったと思う。その宇治さんは今西錦司さんのご子息であった。

一九八五年ブータンを研究していた私が、京都大学ブータンヒマラヤ学術調査隊の副隊長をすることになった。その了承を得るために、この隊の隊長である堀了平さんが、民博に梅棹さんを訪ねてこられた。梅棹さんはひと通り計画を聞いたあと、「栗田、出番や」とひとこといわれた。学術調査や登山隊に対して、これほどまでに理解のある先輩があるだろうかとありがたかった。

それは一九八六年のことであった。梅棹さんは「今年の夏、いま一度、立山に登ってみたい」と言いだした。梅棹さんは「山登りはゆっくりした歩調で、一歩一歩登ってゆけば、その内に頂上に着く」と話していた。この計画を実行するためには、現役山岳部員に手伝ってもらおうと思いをめぐらせていた三月十二日、梅棹さんは突然視力を失った。

私は梅棹さんと立山に登る機会を失ってしまった。

失明からしばらくの間、梅棹さんは失意のうちに過ごしていた。しかし中央公論社の嶋中鵬二社長が、このような病を得たことは、梅棹さんの今までの業績を整理する絶好の機会が与えられたと考えてはどうかと言い出された。そこで梅棹さんは、敢然と著作集の編集に乗り出した。私はその第一巻『探検の時代』の編集を担当した。この巻には、梅棹さんが中学校の時代に登った京都の北山、三高時代、仲間とともに第二松花江の源流を発見した白頭山での探検の記録などを収録した。

梅棹さんはこの著作集の編集を通じて、若い日に登った山やまへの追想を楽しんでいた。

梅棹さんは一九九三年、民博館長を任期満了で退任された。そして私は二〇〇三年、民博を定年退官した。

二〇〇三年、梅棹さんは滋賀県東近江市にある「西堀栄三郎記念　探検の殿堂」に、日本を代表する五〇人の探検家のひとりとして殿堂入りした。この地に「探検の殿堂」が一九九四年につくられたのは、西堀栄三郎さんの先祖が、この地の出身だったからである。

二〇〇九年九月、斎藤惇生さんの誘いで中国側から白頭山に登ることになった。私は梅棹さんを訪ねて、これから白頭山に登りにゆきますと話に行った。そして帰ってからの一〇月、ふたたび梅棹さんを訪ねて現在の白頭山の様子を報告した。梅棹さんは驚くべき記憶力で、六十九年前の白頭山の話をしてくださった。

これが一九六二年の三高会館以来、四十八年間続いた梅棹さんとの最後の語らいであった。

梅棹忠夫氏略年譜

（おもな海外調査と山関係の業績を中心として）

一九二〇年（大正九年）〇歳
六月一三日　京都市上京区にて出生。
一九三二年（昭和七年）一二歳
四月　京都府立京都第一中学校に入学。博物同好会に入部。九月山岳部にも入部。
一九三四年（昭和九年）一四歳
一二月「山城三十山」の改訂作業が終わり、その山岳誌『山城三十山記　上篇』（大橋秀一郎編）が発行された。
一九三五年（昭和一〇年）一五歳
七月一六日『山城三十山記　下篇』を編集・発行。
一九三六年（昭和一一年）一六歳

三月　京都府立京都第一中学校第四学年修了。
四月　第三高等学校理科甲類に入学。山岳部に入部する。
一九三九年（昭和一四年）一九歳
一月　京都探検地理学会に入会。
一九四〇年（昭和一五）年）二〇歳
七月二五日　第三高高等学校山岳部員として、伴豊、藤田和夫とともに、朝鮮半島、咸鏡北道および咸鏡南道の山やまをあるく。冠帽峰連山、魔天嶺山脈をこえて白頭山に登頂。北面をくだり第二松花江源流を確認。安図県（当時の満州国間島省―現在の中華人民共和国吉林省）をへて新京（現在の中国吉林省長春）にいたる。九月四日帰洛。
一二月二四日　京都探検地理学会樺太踏査隊（隊長藤本武）に参加。イヌぞりの性能調査をおこなう。
一九四一年一月中旬帰洛。
一九四一年（昭和一六年）二一歳
三月　第三高等学校卒業（理科甲類）。
四月　京都帝国大学理学部に入学。主として動物学を専攻。
七月一四日　京都探検地理学会ポナペ島調査隊（隊長今西錦司）に参加。パラオ、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルートの各島を歴訪。七月二九日以降はポナペ島の生態学的調査をおこなう。トラック、サイパンをへて、一〇月八日横浜に帰着。
一九四二年（昭和一七年）二二歳
五月　北部大興安嶺探検隊（隊長今西錦司）に参加。その支隊（支隊長川喜田二郎）の一員として脊梁山脈ぞいの白色地帯の突破に成功。七月帰国。
一九四三年（昭和一八年）二三歳
九月　京都帝国大学理学部卒業（主として動物学を専攻）。卒業論文は「黒竜江上流の魚類群聚」。
一〇月　京都帝国大学理学部大学院に入学。特別研究生となる。動物学教室第二講座に所属し、宮地伝三郎助教授の指導をうけ、動物生態学を専攻する。一九四五年九月前期二年を修了。
この年の秋、ＡＡＣＫ（のちの社団法人京都大学学士山岳会）に入会。
一九四四年（昭和一九年）二四歳
五月初旬、今西錦司、藤枝晃とともに中国大陸にわたり、当時の蒙古自治邦政府所在地の張家口市にあった財団法人蒙古善隣協会西北研究所の嘱託となる。
六月九日　愛新覚羅連紘とともに張家口を出発。チャハル盟粛親王府牧場に到着し、約一カ月滞在する。同牧場にてモンゴル語および乗馬術を習得。
九月六日　チャハル盟およびシリンゴル盟のモンゴル牧畜調査に出発。隊長今西錦司、隊員加藤奉安、酒井行雄、中尾佐助、和崎洋一、梅棹忠夫。以後、粛親王府牧場をへて、チャハル盟を北上し、グンシャンダク砂丘群を横断してスニト部にはいる。今西、中尾、梅棹は外モンゴルとの国境に達し、ひきかえす。南下してふたたびチャハル盟にはいり、上都（アトーチン）旗より東にむかい、粛親王府牧場に到着。一九四五年二月二六日、張家口西北研究所に帰着。
一九四五年（昭和二〇年）二五歳
八月一五日　終戦。
八月二一日　無蓋貨車にて張家口を脱出。二三日天津着。
一二月　北京に移動。重要物資管理組合理事長の斎藤茂一郎の邸宅の一室に今西錦司とともに寄宿。
一九四六年（昭和二一年）二六歳
五月上旬　北京在留日本人帰国者とともに塘沽（たんくう）に集結。アメリカ軍上陸用舟艇により帰国。佐世保に上陸し、京都にかえる。
五月一五日　京都帝国大学理学部動物学教室に復帰。大学院に再入学。
一九四八年（昭和二三年）二八歳
この年、自然史学会の設立とともに入会、常任委員となる。
一九四九年（昭和二四年）二九歳
四月三〇日　大阪市立大学助教授（理工学部生物学教室）となる。
九月九日　京都府山岳連盟の屋久島踏査隊に参加。隊長は今西錦司、隊

員は西岡一雄と梅棹のふたり。鹿児島から七島丸という船で種子島の西之表港をへて、屋久島の安房港に到着。宮之浦岳に登頂。下屋久村の尾ノ間をへて、栗生から上屋久村の永田、一湊、宮之浦と島を一周する。一〇月上旬帰洛。

一九五二年（昭和二七年）三二歳

二月一〇日　AACKがマナスル登山計画を日本山岳会に委譲したころ、日本山岳会に入会。マナスル計画に参加するつもりであった。この年の夏、肺結核の診断をうけ、自宅にて二年間の療養生活を余儀なくされる。

一九五五年（昭和三〇年）三五歳

五月一四日　京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊（隊長木原均）に参加。ヒンズークシ支隊人類学班（班長岩村忍）に属し、モゴール族の調査研究を中心におこなう。自動車でカーブルからカイバル峠をこえ、北インドを横断してカルカッタまでもどる（同行者F・シュルマン、E・ランダウアー）。一一月一一日帰国。

一九五六年（昭和三一年）三六歳

九月一七日　『モゴール族探検記』（岩波書店）。

一〇月二五日　『アフガニスタンの旅』（岩波写真文庫）。

一九五七年（昭和三二年）三七歳

二月一日　「文明の生態史観序説」を『中央公論』二月号に発表。

一〇月二九日　第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊に隊長として参加（タイ、カンボジア、南ベトナム、ラオス）。一九五八年四月一六日帰国。

一九六〇年（昭和三五年）四〇歳

一一月二五日　『日本探検』（中央公論社）

一九六一年（昭和三六年）四一歳

三月　大阪市立大学・京都大学合同のカカボ・ラジ登山探検隊の隊長として準備にかかったが、ビルマ政府の許可がとれず実現しなかった。

一二月五日　第二次大阪市立大学東南アジア学術調査隊（隊長岩田慶治）に参加し、北タイの調査をおこなう。のち単独でビルマ、東パキスタン、インド、ネパールを踏査。一九六二年二月七日帰国。

一九六三年（昭和三八年）四三歳

七月六日　京都大学アフリカ学術調査隊（隊長今西錦司）に参加して、タンザニアの牧畜民ダトーガ族の人類学的調査をおこなう。一九六四年三月二四日帰国。

一九六四年（昭和三九年）四四歳

一二月七日　発足したばかりの日本ネパール文化協会（一九七二年六月二四日、日本ネパール協会に名称変更）に入会、評議員に選ばれる。

一九八四年以降は顧問。

一九六五年（昭和四〇年）四五歳

八月一日　京都大学助教授（人文科学研究所）となる。今西錦司教授のあとをうけて社会人類学部門を担当し、共同研究班を組織する。

一一月一日　『サバンナの記録』（朝日新聞）。

一九六七年（昭和四二年）四七歳

六月一四日　第一次京都大学ヨーロッパ学術調査隊（隊長桑原武夫）に参加。主としてスペインのバスク地方で農村調査をしたのち、自動車でポルトガル、スペイン、アンドラ、フランスを旅行。一〇月一二日帰国。

一九六八年（昭和四三年）四八歳

三月四日　京都大学大サハラ学術調査隊（隊長山下孝介）に参加。リビアで牧畜民の調査研究をおこなう。四月九日帰国。

六月　日本万国博覧会世界民族資料調査収集団を編成、万国博覧会テーマ館用の民族資料の収集を指揮する。

一九六九年（昭和四四年）四九歳

四月一日　京都大学教授（人文科学研究所）に昇任。社会人類学部門を担当。

六月二五日　第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊（隊長会田雄次）に参加。谷泰、野村雅一とともに中部イタリアの山村で調査。そのあとベオグラード、ユーゴスラビアのツ

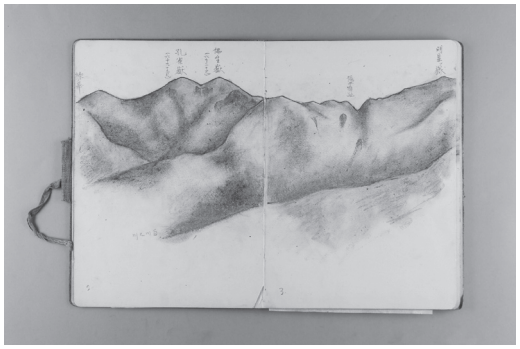
ルナ・ゴーラ地方のドルミトール山群で調査。九月二七日帰国。
七月二一日　『知的生産の技術』（岩波書店）。
一九七〇年（昭和四五年）五〇歳
五月　サンケイ新聞の第一回サンケイ・アドベンチャー・プランの審査委員となる。以後一九七三年まで、毎年その審査にあたる。
一九七一年（昭和四六年）五一歳
九月一〇日　日本万国博覧会記念協会評議員。
一九七四年（昭和四九年）五四歳
六月七日　国立民族学博物館が創設され、その初代館長に就任（～一九九三年三月三一日）。
一九八四年（昭和五九年）六四歳
三月　白馬村国際文化・スポーツ協会顧問。
一九八六年（昭和六一年）六六歳
三月一二日　視力を失う。ウイルスによる球後視神経炎と診断される。
一九八七年（昭和六二年）六七歳
七月　フランス国パルム・アカデミーク勲章コマンドゥール章受章。
一九八八年（昭和六三年）六八歳
一月二九日　昭和六二年度朝日賞受賞。
五月二六日　紫綬褒章受章。
一九八九年（平成元年）六九歳
一〇月二〇日より「梅棹忠夫著作集」の刊行はじまる。全二二巻、別巻一（～一九九四年六月）。
一九九〇年（平成二年）七〇歳
国際交流基金賞受賞。
一九九一年（平成三年）七一歳
一一月三日　文化功労者として顕彰される。
一九九二年（平成四年）七二歳
一〇月一日　「西堀栄三郎記念　探検の殿堂」探検家選考委員会委員。
一九九三年（平成五年）七三歳
三月三日　国立民族学博物館長を任期満了により退任し退官。同名誉教授となる。
一九九四年（平成六年）七四歳
六月一二日　京都北山、雲ケ畑川源流の京一中小屋跡に、今西錦司の記念碑がつくられ、その除幕式に出席。
一一月三日　文化勲章受章。
一九九五年（平成一五年）七五歳
一〇月　京都市名誉市民。
一〇月一四日　日本山岳会名誉会員となる。
一一月　勲一等瑞宝章受章。
一九九六年（平成一六年）七六歳
一月　京都大学名誉教授。
二〇〇一年（平成二一年）八一歳
日本山岳会の永年会員として表彰。
一〇月二七日　信州大学山岳科学総合研究所設立前の山岳科学フォーラムで特別講演「山と学問」をおこなう。
二〇〇二年（平成一六年）八二歳
国際山岳年国内委員会の特別顧問。
八月二五日　富山にて、国際山岳年記念「立山フォーラム」にて記念講演「登山と観光開発」をおこなう。
一一月一六日　大阪にて、国際山岳年日本委員会の事業「シンポジウム山との出あい――日本百名山が問いかけるもの」にて基調講演「山と文明」をおこなう。
二〇〇三年（平成一五年）八三歳
二月二三日　「西堀栄三郎記念　探検の殿堂」に探検家として顕彰される。
二〇〇九年（平成二一年）八九歳
七月五日　『山をたのしむ』（山と溪谷社）。
二〇一〇年（平成二二年）九〇歳
七月三日　老衰により逝去。

「梅棹忠夫著作集」別巻『年譜　総索引』（中央公論社）、『山をたのしむ』（山と溪谷社）、『ヒマラヤへの道――京都大学学士山岳会の五十年』より栗田靖之作成。国立民族学博物館梅棹資料室・三原喜久子監修。

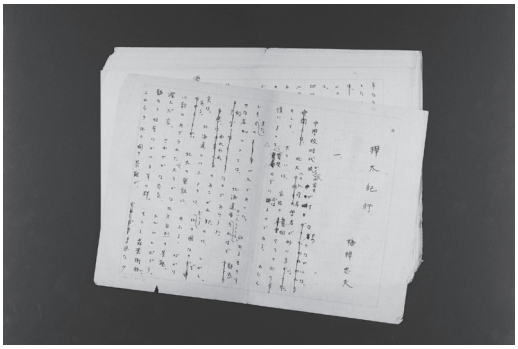
発行日　二〇一一年三月一〇日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　上田　豊
発行所　〒六〇六―八五〇一
京都市左京区吉田本町（総合研究二号館四階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
編集人　竹田晋也　気付
前田　司
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
㈱土倉事務所

梅棹忠夫氏のフィールドノート

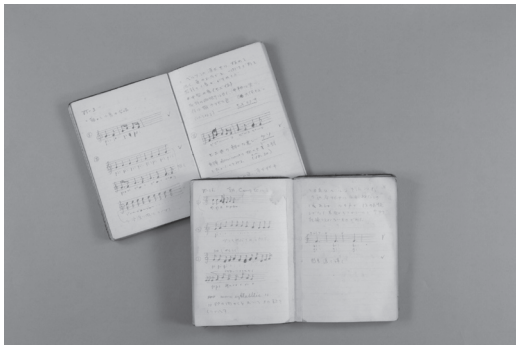
—2011年春特別展「ウメサオタダオ展」展示品の一部



山のスケッチ（1935）
梅棹は、中学四年生の夏やすみに、台高山脈と大峰山脈を友人ら3人とともに縦走した。スケッチブックには9ページにわたってパノラマで山なみがえがかれている。



未刊行原稿「樺太紀行」（1940）
梅棹は、京都探検地理学会のカラフト踏査に参加し、みずからイヌぞりを実測して、その結果について本格的な論文をかいた。そのほかに、刊行されなかった原稿ものこされている。ローマ字運動に没頭するまえの文章である。



大興安嶺フィールドノート（1942）
梅棹は、京都帝国大学の北部大興安嶺探検隊に参加し、地図上の空白地帯を踏査した。その際のフィールドノートには、各種の鳥の声や、沢をわたる風の音が、採譜されている。

アフリカでのフィールドノート（1963～64）
梅棹は、京都大学アフリカ学術調査隊に参加し、おもにエヤシ基地でダトーガ族の民族学的調査に従事した。そのさいのフィールドノートはB5サイズのノートとそれを半分に裁断したものと合わせて50冊ほどのこっている。

写真提供：国立民族学博物館　広報企画室

図書紹介

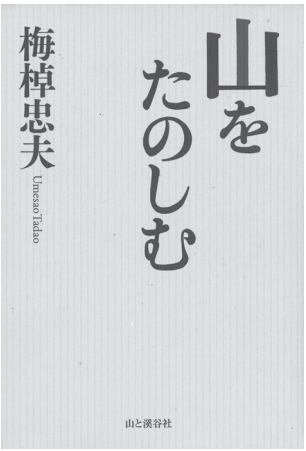
山をたのしむ　梅棹忠夫著

本誌別冊にお寄せいただいた追悼文中に何人ものかたがこの著書にふれておられる。

氏の著作のほとんどは「梅棹忠夫著作集」に収められている。この刊行後に山や探検に関して講演された折の原稿や雑誌に掲載された文に、あたらしく企画された二本の座談記録を加えて刊行されたのがこの著書。しかし多数の著書をものにされている氏ではあるが、この本が山や探検に関する初めての単行本とは少々驚く。

本書は書き溜めておられた原稿の採録が中心であるので、氏の山や探検に対する思想がくりかえし出てくるが、読み終えるとすっかり梅棹イズムに感化されてしまう。なんともまあ、巧妙な洗脳書である。

戦前のＡＡＣＫ最後の会員と自負される著者なるがゆえにＡＡＣＫへの熱き思いも各所に語られている。ぜひ一読願いたい。



山と渓谷社　2009年刊
定価2,940円
《B6判　366ページ》

特別展

ウメサオタダオ展―知的先覚者の軌跡

国立民族学博物館を創設し、初代館長をつとめた梅棹忠夫は、つねに分野をこえて、平易なことばで、斬新な知見をしめしてきました。本特別展ではかれの足跡をたどりながら、その思想の先見性や実効力をあらためて発見していただきます。タイトルのウメサオタダオというカタカナ書きは、そうした先覚性や革新性をあらわしています。

名著『知的生産の技術』（1969年岩波新書）ができるまでの、カード、こざね（メモの連なり）、直筆原稿など、すべてを初公開します。また、著作集全22巻をおもにとりあげ、どのような観察記録から生まれたものかを復原します。

日本のいかなる問題も、もはや日本だけで解決することのできない現代において、わたしたちにもっとも必要なことのひとつは、世界に対する好奇心ではないでしょうか。

あくなき好奇心を発揮し、世界をあるき、ひらめきをのがさず、未来を想像し、文明論を構築していった、知的先覚者の軌跡。それは、みなさん一人ひとりに、混迷の時代をこえて未来をつくる羅針盤をきっとしめしてくれるにちがいありません。ウメサオ流世界のあるきかたのツボを、どうぞ、つかまえにきてください。

1963-'64年　京都大学アフリカ学術調査隊
人類班のエヤシ基地にて　隊員たちと

京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊の個人装備用木箱とフィールド・ノート（フィールド・ノートは、モンゴル1944-'46年、アフガニスタン1955年、アフリカ1963-'64年のもの）

『知的生産の技術』構想時の「こざね」（1960年代）
梅棹は、要点を一枚ずつ小さな紙にかきつけ、それを配列してホッチキスでとめて部品をつくり、文章にしあげてゆく、という方法を提唱した。よろいを構成する部品の名前をとって、こざね法とよばれている。

カナかなタイプライター（1973年）
梅棹は、1970年以来、1台でカナ、かな、ローマ字のうてる縦がき電動タイプライターの開発にかかわった。商品化されなかったので、世界にこれ1台しかない。（ブラザー工業株式会社所蔵）

モンゴル図譜（1944～'45年）
梅棹は、蒙古善隣協会西北研究所のエクスペディションに参加し、A5判の画用紙に、おおくの生活用品をえがいて記録している。これらのスケッチは、『有蹄類動物之生態学的研究』などと偽装した箱にいれて無事にもちかえることができた。

関連イベント

■企画展
「民族学者　梅棹忠夫の眼」
会期：3月3日（木）～6月14日（火）
開催場所：国立民族学博物館　本館展示場

■みんぱくゼミナール
開催日時：3月19日（土）、4月16日（土）、5月21日（土）

■みんぱくウィークエンドサロン
研究者と話そう
毎週日曜午後

■研究公演
開催日時：5月5日（木・祝）予定
※要事前申込

※ 詳しくは、国立民族学博物館ホームページ（http://www.minpaku.ac.jp/）をご覧下さい。

- 開館時間：10：00～17：00（入館は16：30まで）
- 休館日：毎週水曜日（ただし、5月4日（水・祝）は開館）
- 無料観覧日：3月13日（日）、5月5日（木・祝）
- 主催：国立民族学博物館
- 協力：財団法人千里文化財団
- 観覧料：一般420円（350円）、高校・大学生250円（200円）、小・中学生110円（90円）
  （　）は、20名以上の団体料金、大学等の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、3ヶ月以内のリピーター、満65歳以上の方の割引料金（要証明書等）
  大学生は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程
  自然文化園（有料区域）を通行される場合は、自然文化園各ゲート脇の券売機で当館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。
  障害者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに、無料で観覧できます。
  毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。ただし、自然文化園を通行される場合は、同園の入園料が別途必要です。
  お問い合わせ先：国立民族学博物館　〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 TEL 06-6876-2151